

今の所没にした S S の 供養場

ピーピンアッタマート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは、プロットだけ作ったものの実際にはきちんと話を書かずにエターナルの海に沈んだブツの供養である。

原作知識ありオリ主とか、そもそも小説といふかなんといふかなブツも沢山あり、台詞だけを入れて地の文を入れる前に飽きた廃材なども存在する。自分で読み返す分には楽しかったので、ひよつとしたら他の人にも楽しいかもしれない。

◆読んで欲しい◆

目次

だったもの

- 原作知識有のスカムオリ主が行く忍殺第
三部（ニンジャスレイヤー）—— 1
- 悪魔の独白（魔法少女まどか☆マギカ「新
編」叛逆の物語）—— 42
- テンプレ勇者が世界を救った後には、闇
が広がっていたのです（オリジナル）
50
- アイはさだめ、さだめは悪魔（魔法少女ま
どか☆マギカ）—— 77
- 眠りについたナチュラルボーン百合リア
ルニンジャが目覚めてセイジを鍛えなお
したりバイセクターがカラテする予定

原作知識有のスカムオリ主が行く忍殺第三部（ニンジャスレイヤー）

どうも、突然だが俺は……俺は？

よく分からない。

俺はノードラッグだ。宇宙の彼方に精神が飛んでる訳じゃないと思う。サイバーイルカも見てないしな。まあそれはいい。問題は。

「どっだよ、ハハハ」

気づいたら、この妙な空間の中に居たんだ。それが、問題だ。

無限に広がってる感じがする。ここには、上空に黄金の立方体が有った。俺の身体はそんな場所の大空を飛んでいて、風も無いのに髪がなびいた。

まったく、どういう事だ。気づいたらこんな所に来ていたなんて。悪夢か？ 使つてもいないドラッグのトリップか？ まあそれは良い。俺はイルカだったんだ。いや、イルカなのか。

ダメだ。考えが纏まらない。混乱しているのかね、そうだろうな。当然だ。

ともかく、ここには誰も居ない。いや、俺以外はね。

でも何だろうな。こんなに寂しい場所なのに、俺はまるで寂しいと思わない。荒涼とした砂漠なんかよりもずっと人気の無い世界に取り残されている筈だけど、それがまったく気にならなかった。

不思議と解放感がある。俺が裸だからか。露出狂って奴なのか。不味いな、自分がそんな性癖を持っているとは思わなかった。どうでも良いが。

それよりも、記憶が曖昧で、俺の身に何が起きたのかも分からないのが問題だ。この精神世界の様な場所で、黄金の何かの傍を飛ぶという体験をしている俺は、一体誰なんだ。

俺に残されたものは、俺が俺だという感覚と、もう一つ。

この空間に近い物を知っているという事だけだ。ああ、それはつまり、眩きによる電子小説の記憶に他ならない。

つまり、ここは……

「コトダ……なんだっ!？」

身体が、急に何かへ引き寄せられていく。

何だ、吸い込まれてる。ああ。違うこれは追い出されているのか。何だこれ。分からない。しかし、いや、俺はこれを知ってるぞ。知ってる。知って。

町並みに居る俺は、ちゃんと服を着ている。

下はジーンズだ。膝や股、付け根に亀裂の走ってる……ダメーゾジーンズって奴か？ そいつだ。上は、ああ、セーターだな。もこもこだ。触り心地が良くて大変結構。

どうやら公衆の面前で全裸は避けられた様だ。安心したよ。俺は真人間だからな。

安心したお陰で、人の顔を見る余裕が出来る。道を行く人達の顔は少し暗い。相撲取りの様な体躯の男、それに着物を着た女が歩いていて、何やら不思議な雰囲気を漂わせていた。ビジネス街ではなさそうだ。

だが、だからといってキョートめいて歴史的空間を彩る和風な何か、でも無いらしい。何せ看板が一々性的だ。歴史表現的観光名所では、こういった物は排除されるだろう。

「おはよー」

「おはようございます」

挨拶の会話が耳に届く。声の元へ目を向けると、男装をした二人の女が、手を挙げて挨拶をしていた。それなりに奇抜だ。しかし、ありふれた日常風景にも見えた。

「んー……」

町中を歩けば、奇異の目で見られる様な派手な格好をした人々が、当たり前前の様に受け入れられている。

包容力というか、マイノリティを受け入れる空気が町全体に流れている様に感じられ

た。異なる人を受け入れる心、暖かみが有るのだ。

此処は、どこだろう。何となく昼間の繁華街に見えるが。

「どこだー……？ 参ったな」

見知らぬ土地で一人になるのは、心細い。

町中に居るのは話しかけ安そうな人ばかりだが、俺の身体は何となく動かなかった。話す事に勇氣は要らない。だが、何となく踏み出せない。

記憶の中の空より、この町の空はかなり暗い。空気も淀んでいる様に感じられる。それがまた居心地の悪い物で、俺は話しかけられる相手を捜す。

周りをよく見て、どこかに良い人が居ないものかと考えてみる。俺の方を見て、着物の女が舌なめずりをした。目を逸らした。そういうのも好きだけど、今はその気分じゃない。

今度は男が俺の方を見つめた。熱っぽい目つきだ。勘弁して欲しい。

うんざりしながら顔を背ける。その先に、ジャージを着た、女子大生くらいの女の子が二人で歩いていた。

片方の、短髪の子を見た。

その時、俺の背中に何かが走り、あの子に話しかけるべきだ、という確信が宿った。獣じみた直感だった。

二人の女の子は、すこぶる仲良く笑い合っている。

ジャージ女子。カワイイな二人。この繁華街らしき場所を二人つきりで、手を繋いで歩いている……こういう場所で二人きりだ。売春でなければ……いや、売春じゃないだろう。二人の面持ちが酷く綺麗だ。という事はつまり、世に言う百合カップルなんだろうか。ドキドキしてきた。

中でも、俺の目を釘付けにしているのは片方の女の子だった。黒髪の短髪で、綺麗な目をしている。口元に浮かんだ微笑みは、片割れの女の子へ向けられていた。その胸は薄かった。平坦だ。

もう片方の子は余り気にならない。元々髪を三つ編みにでもしていたのだろう、ストリートロングだが、微妙に癖がついている。どうにも地味な顔立ちだったが、それを彩る幸福そうな笑顔が、愛らしさを際立たせていた。その胸は普通だった。

二人とも、幸せそうな顔だな、と思う。

……片方の子がその手に刀を持っていなければ、ただの素敵な光景だ。

見た所、そこそこの腕を持つている様に感じる。その身から微かに溢れる桜色の粒子が、周囲を警戒している様だ。どうやら、俺にしか見えていない様だが。

しかし、俺はどうにも目が離せなくなっていた。

邪魔かな。申し訳ないな。そう思いながら、俺は二人の元へ駆け寄った。

「ドーモ、すみません」

「……あ、はい」

二人の内、地味めな女の子が俺の方を向いて、ぼんやりとした顔で俺の言葉に答えてくれた。

その頬は赤い。やっぱりカップルなのか、デート中なのか。やはり、俺は邪魔だな。

「……」

刀を持った女の子が俺を睨んでる。そりやそうだ、カップルの邪魔をした上に、俺自身も怪しい事この上ないんだから。

疑われるのも嫌だが、それより俺は彼女に質問をしなければならぬ。

「いや、すみません。場所を聞きたくて。ここ、どこですかね？」

警戒を滲ませていたロングの女の子は、俺が道に迷っているだけと悟って、少し肩の力を抜いて、答えてくれた。

「えつと……ネオカブキチヨのニチヨームですよ？」

「はあ、歌舞伎町の二丁目ですか」

今、発音がおかしかったな。もしかして海外から来た子で、日本語を覚えてたのかなもしれない。それでも頑張って答えてくれた所を見る感じ、良い子みたいだ。

話しかけた相手が良い人だった。俺は運と直感に優れている様だ。

そして、ここは歌舞伎町か。行った事無いけど、歌舞伎町なら日本だ。いや……ん？
日本？ 歌舞伎町？ 俺はなにを考えている？

よく分からないが、とりあえず道を聞かねば。

「じゃあ、どこから出られるかって、分かります？」

「あ、それは……」

ロングの女の子が答えようと、周りを見回した。この子も、あまりこの辺りには詳しくないのだろう。

「ええつと……ごめん、私じゃ分からないの、代わりに教えてくれないかな」

ロングの女の子には道が分からなかったのか、隣の子へ尋ねかけようとした。俺も、注意をそちらへ向ける。

その瞬間、ショートの女の子が刀に手をかけた。

「え？」

「お前は……」

女の子が、絞り出す様な声を出す。

瞳に、仄かな桜色が光っていた。

細身と刀、そして桜色の取り合わせが、何やら幻想的な空気を纏っている。

「や、ヤモトさん!? 何で刀なんか……」

……?

……っ!?

えっ? ……ヤモト〓サン!?

聞いた事の有る名前だ。

俺はその名前を知っている。その平坦な胸を知っている。彼女が何者なのかを知っている。

しかし、実際に顔を見るのは、初めてだった。

「どうも……ヤモト・コキです」

両手を合わせた素早いお辞儀に、俺は対応出来なかった。戸惑いが、俺を止めていたからだ。

え、本当にヤモト〓サン?

……つて事は、なに。ここ忍殺世界？

改めて見ると、看板にオイランドロイドの宣伝が有るし、『實際安い』とか『アカチャ』とか、そういう感じの変な日本語広告が有る。

そういえば、通ってる人間にサイバー感溢れるサイバネ義肢やサイバーサンングラスが着いてる様な、ニューロマンサーかブレードランナー的なアトモスファイアだ。間違い無いぞ。ニューロマンサーって何だろうな？

まあいい。だけどもるで気づかなかった。だけど、ここは確かにニンジャスレイヤーの世界だ。

ニンジャの……世界！

「や、ヤモトさん？」

「アサリさん、そいつから離れて」

おっと、現実逃避している間に、ヤモトⅡサンが隣の子を退けていた。

……待った。俺は詳しいんだ。分かったぞ。つまり、今俺が話しかけていた相手は、アサリⅡサンだな？

ああ、通りで。ちよつと地味めだけど、素直で純朴で良い子そうだ。よく見ると、『ラストガール・スタンディング』のウキヨエ版の外見に、心なしか似てる。

ニチヨームにアサリⅡサンが居たのは、『サツバツナイト・バイ・ナイト』後の四日目の朝までだから、今はあの後ヤモトⅡサンと一緒に居た時間なのか。空白の三日目はデートだったのか。

尊い時間を使わせてしまつて、何だか申し訳ない。

「そうか、君達はヤモトⅡサンとアサリⅡサンなのか」

なんだか、警戒されている事に完全な納得をってしまった。

ああ、そりや何だかんだ言つてもニチヨーム治安悪いし（この場合は観光客の方が悪いらしいが）、アサリⅡサンと自分に話しかけてくる奴が居たら警戒するよな。アサリⅡサンが知らない人と喋つてたら心配だもんな。良い子だし、騙されて薬物強制前後とか、このマツポーの世ならあり得る。

そういうえば……この子、もうヨタモノにフアック&サヨナラされかけた経験持つてるんだよな……無軌道学生に薬物前後未遂……

マツポーの世にも関わらず見ず知らずの俺に道案内をしようとしてくれた、こんな良

「子が……何か腹立ってきたぞ。変態野郎は殺す、慈悲は無い。」

「あつ、待つて。違うから、威嚇とかじゃないから」

「まずい。殺気立ってんのがバレた。違うよ、君達みたいな素敵な女の子達を傷つける外道クソ野郎をネギトロにしたいだけなんだ。」

「でも、その気持ちは伝わらなかつたらしい。滅茶苦茶殺気立って、俺の事を睨んでくる。」

「大切なんだろうな、アサリⅡサンの事。でも、こんな所で怖い気配だだ漏れにしてたら、店の人に迷惑なんじゃないか。」

「あ、あー……こんな白昼でニンジャ気配を出したら、モーターが発狂しちゃうんじゃないかな？」

「……心配しないで良い。隠すのは、慣れてるから」

「ヤモトⅡサンが目を細めて、俺を観察している。マゾじゃない俺には少し居心地の悪い視線だ。」

「ニンジャに睨まれているのに、俺は不思議とNRSを起こさない。俺がこの世界の人間じゃないからか。はたまた、何か理由が有るのか。」

「あ、あの……ヤモトさん……」

「アサリさん、大丈夫？」

「うん、でもあの人、道を聞いたただけだよ？」

「うん。だけど……」

あ、ヤモトⅡサンこれ信じてないわ。アサリⅡサンを、じゃなくて、俺を。

絶対これ、道を聞いて暗がりに連れ込んで前後するとか、そういうゲスだと思われるわこれ。今の俺ってそんな、邪悪存在な気配出してるの？ 俺、かなり控えめで邪悪ではない方なだけ。

それにしても、この世界に来て最初に出会った相手がアサヤモなんて、俺は運が良いな。警戒されっぱなしなのはコワイけど、それも帳消しに出来るくらい嬉しいな。

だって俺百合とか大好きだし！

ほら、この、二人揃ってジャージでも、お揃いの服を着ている姿が、とても可愛らしい。

しかも二人は絆を感じさせる様にお互いを守ろうとしてる。アサリⅡサンの奥ゆかしい優しさ、ヤモトⅡサンの尊い慈しみの何か。絆がとても有る。アーイイ、たまらない……

「っ」

「ん？ 何か変な顔してたか？ 俺？」

「……変な、笑顔だと思つて」

「そうか、そりゃ悪かった」

素直に頭を下げると、ヤモトⅡサンは毒気を抜かれた様に目を見開いた。研ぎ澄まされたニンジャ戦士から、年齢相応の可愛い女の子へ変わる瞬間、それを俺のニンジャアイは明確に捉えている。

「……？」

あれ、怪訝そうにしてる。

もしかして、俺が挨拶を返さなかったからか。ニンジャじゃないんだけど。

折角、ヤモトⅡサンが挨拶してくれたんだ。返事はしたい。けど、何て名乗れば良いんだ？ 本名？ ……俺の本名、なんだっけ？

「ドーム……えつと、あー……」

どうしても名前が出ない。

どうした物か。名前は実際重要な要素だ。パワーワードにもなる。挨拶に挨拶を返さないのはスゴイシツレイに当たる。俺はこの世界の住人じゃないから、問題ないかもしれないが……

しかし、どう名乗ろう。ニンジャネームなんて俺、もってねえよ？

「……ん？」

つまり、俺が……カツ・ワンソー？ 世界最初のニンジャにして、ニンジャにとってのニンジャの、カツ・ワンソー？

神話級のニンジャ六騎士とハトリ・ニンジャを相手に出来る程の強者であり、未だにキンカク・テンプルで目覚めを待つ、ニンジャスレイヤー作中で最も強大な秘密重点存在で、作中世界観の根幹に関わっていて、しかもダークカラテエンパイアの主となる可能性が高い、あの!! 暗黒のカラテ帝国!!

ぬ、ニンジャ!? ニンジャナンデ!?

でも嘘だろ? 嘘だよね? 俺がカツ・ワンソーなわけねえもん。

だ、だって。俺。

「……」

「や、ヤモトさん。この人は、女の人だよ?」

「そうじゃないんだよ、アサリさん……」

俺って、女なんだぜ!?

カツ・ワンソーは男だろ!?

だけど、挨拶は実際神聖だ。だから俺は口をつけて出た名前を使った。ニンジャが挨拶において名乗りを上げるなら、本能的な言葉として出た、その名前が間違いな訳がない。

いや、待ってくれよ。驚くのも無理はないけど、落ち着け俺。俺は、本当に自分の名前だと思って挨拶したんだよ。それがカツ・ワンソーだった?

つまり、こうだ。俺はカツ・ワンソー。

……ラリツてんじゃねえだろうなオレッツコラー!

しかし、本当にそうだとしたら。俺llイルカllカツ・ワンソーという図式が完成……マグロ狂気はまだ俺の頭に残ってるのか。イルカは関係ない!

「ツ・ワン……う」

あ、まずい。ヤモトllサンがジロっ! って感じの目で俺を見てる。

パニック起こす暇があったら、ヤマトⅡサンに警戒を解いて貰う様に努力するべきだった。

……ドウシヨ?

十——

黙っていても埒があかない。しかし、何を言えば良いのかが分からない。

そういう経験をした事は誰にでもある筈だ。そして今の俺が置かれている状況も、そういうアレだ。

「……あなたは、誰なの。答えて」

ヤマトⅡサンがああ綺麗な瞳で俺を見ている。隠しているが、ニンジャ存在感が俺には捉えられる。

少しずつ、殺気立ち始めている気がした。アサリⅡサンをいつでも逃がす事が出来る立ち位置で、俺が攻撃を仕掛けたら、アサリⅡサンの盾になれる場所だ。

身を挺して、一秒でも時間を稼ぐべく、決死の覚悟までしている様にすら見える。アサリⅡサンを無事に逃がす為なら、自分の命を捨てるのも辞さない覚悟だ。

だけど勿論、俺に攻撃の意図は無い。全くない。これっぽっちも無い。有るのは、驚

きと困惑だけだ。

「俺は、ただの迷子だ。困った事にニチヨームへ迷い込みしまって、帰り道が分からない。本当だ」

出来るだけ情けない顔をして、無害さをアピールしてみる。

……ダメか。どうも警戒されている。どうしてだろうか。ヤモトⅡサンはニンジャ真実に近くないから、又ンジャという単語にそれほど大きな反応を見せる筈も無し。

これがフジキドⅡサン辺りなら俺はとつくに逃げてる所だけど、ヤモトⅡサンは良い子だから、「慈悲は無い」される事は無い……と信じよう。

「つまりだ、俺は別に敵とかそういうのじゃないんだ。だからそうやって警戒するのは止めてくれ」

手を振って、身体の力を抜く。多分大丈夫だ。まだ大丈夫そうだ。

ウバステが動いた瞬間逃げる。多分、俺は彼女を殺せるが、そんな事は絶対にしない。この子は素敵で平坦な女の子で、俺は、そういうのが大好きだからだ。

しかし、どうにもならないのも事実だ。

「ヤモトさん、この人は道を聞いたただだよ」

「でも……」

アサリⅡサンが助け船をくれた。

ああつ、アサリ＝サンは天使だ！ 菩薩だ！

何度か息を吐き、寶石の様な汗を拭つて（俺はまずここで達した）、刀から手を離す。「アタイの中の何かが、あんたから逃げろつて、そう叫んでる気がするんだ。一人じゃ絶対に勝てない、すぐに逃げろ、アタイを裁くつもりだ、つて」

「気のせいだと思う」

「どうか、君はヤモト・コキであつてシ・ニンジャじゃないだろう？」

「っ！ 何で、知ってるの」

まずい、ヤモト＝サンに入ったりリアルニンジャのネームを出しちまった。

「いや、ほんと。俺はニンジャにしてはかなり控えめで邪悪ではない方なんで。帰り道を教えてくれたらそれだけで立ち去るつもりですから、頼めませんか。道、教えてくれませんか」

こんなにニンジャが下手に出ている。ニンジャがこんな風になりますか？ おかしいと思いませんか？ あなた。

うん、やっぱり俺がニンジャなんてあり得ないね。

「……いいよ」

「良かった！ 悪いね、デートの邪魔をってしまった」

「ううん、こっちこそ。必要以上に警戒したから、ごめんなさい」

「あ、あの。デートじゃないんです」

「何だ、違うのかな？ 幸せそうだったから、つい勘違いしてしまった、悪い」

「ニチヨーム、か。噂には聞いていたけど、良い所だね。ちよつと不穏な空気を感じるけど」

+

一応、帰り道を教えてくれたけど、最後まで警戒されていた気がする。

でもアサリⅡサンは優しかつたな。あんな経験をして、トラウマになっても仕方が無いのに。それでも優しみを忘れない。何て素晴らしい子だろう。ヤモトⅡサンが惚れるのも無理は……あ、違いますね、二人は友達ですね、ハイ。今のはやや邪悪な思考でしたね。

ああ、でも。あの尊いヤモトⅡサンが『ニチヨーム・ウオー・ビギニング』でボロボロにされるのか。

……助けるべきだな、うん。ああ、シマナガシの顔を拝むついでに、フィルギアを丸太で叩いておこう。ついでにシヨーゴーのアフロを触ってみたいし。

俺のニンジャ視力が捉えたその姿は赤黒のニンジャ装束！ そのメンポには「忍」
「殺」の文字！ 何か爆弾らしき装置が取り付けられている！ そして道路を時速六十
キロオーバーで走りながらクローンヤクザと戦っている！

ま、マグロダー!!（ひみつあんごう）

マグロ・サンダーボルトじゃねーか！

アガメムノン〓サンが雷落としてる？ え？ ナンデ？

アマクダリ上層部もマグロ魚群に飲み込まれたのか……？

いや、アガ〓サンどう見ても嫌そうな顔だ。本人的にはまるで気乗りしてないのが分
かる。つて事はチバ〓キュンが飲まれたんだな。つまり。俺は詳しいんだ。

ああ、でもわりと真面目にピンチだ。このままだとあのカラテの化け物スパルタカス
〓サンまで出陣しかねない。

良い所に、何か正体を隠せそうな物が。……マジで？ これ使うの？

背中へのハーネス。明らかに盲導犬だ。犬種は、多分柴だろう。

しかし、これは紛れもないニンジャソウルの気配。

「ストライダーⅡサン……？」

『……？ 何故、私の名前を知っているのだ？』

ニンジャの……犬！ そして、犬にまたがり、上半身にマグロ型スーツを纏ったニンジャ！ そのマグロヘッドには「お」「魚」の二文字！

おお、ゴウランガ！ あからさまに狂人なのだ！ 訝しげなフジキドⅡサンの視線が痛い！

ええい、こうなったらヤバレカバレだ！

「流浪の戦士、マグロニンジャ参上！ ドーモ、ニンジャスレイヤーⅡサン！ 01010101ツ……カツオブシです！ じゃなくてマグロニンジャです！」

「オヌシは……？」

ニンジャスレイヤーⅡサン。とんでもなく胡散臭い物を見る様な目なんだけど。ストライダーⅡサンに乗ってなかつたらスレイ対象になる所だったぜ。

1	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0
	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1
	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1	0
	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1
	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0
	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0
	1	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0
	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0
	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0
	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1
	1	0	0	1	1	0	1	1	1	1	0
	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1	0
	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0
	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1
	1	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0
	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	1
	1	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0
	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0
	1	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0
	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0
	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0
	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0
	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0
	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	1

+

「起きてくださーい……」

「……ハッ!?!」

あれ、どこだここ。古代ローマの深淵は？

……夢かよ。

「どうやら俺は人の家のベランダで寝てしまったらしい。家がないというのはなんと悲しい事だろう。」

「悪いな。ベランダ、借りさせて貰ったよ」

「悪い事をしてしまった。どうやら、女の子の部屋らしい。男の家じゃなくてよかったよ。顔を見てみれば、そこには見知った女の子が。」

「……あれ？ 君って……」

「ロングスカート、地味めなおさげだ。」

「その顔には、見覚えがある。この世界に来たばかりの俺が知っている相手で、女の子と言えば、あの二人しか居ない。そして、彼女の胸はヤモト〓サンほど平坦ではなかった。」

「アサリ〓サン？」

「あなたは……ええつと」

「おおつと、ストップ！ その名前はうかうか出しちゃダメだ！ ええつと、そうだ。名前。カワウソとでも！ ダメか！ ……ツワ、ああ。じゃあツワン、ツワンで良い」

「ツワンさん？」

「そうだ。俺の事はそう呼べば正解さ」

「あの……少し、話を聞いて貰っても良いですか？」

デート案件……じゃ、なさそうだな。どうしたんだろ。

+

「あの……ツワンさんは、ニンジャなんですか？」

「ん、ああ。ちよつと違うが、間違っではないいな」

「それじゃ、ヤモトさんと同じなんだ……」

「彼女とは全く違う物だけだな。常人にとっては想像もつかない力を持っているのは大して変わらないか。それで？」

「私、ヤモトさんの力になりたいんです……だけど、ヤモトさんはニンジャで」

「待った、ヤモトさん||サンはまさか、自分がニンジャだと告白したのか？」

「はい……教えてくれました」

「怖くないのか？」

「ヤモトさんだから……怖くないです」

「ふーん……愛だねえ」

「ヤモトさん、他のニンジャと戦って二日間目を覚まさなかつたんです。その時は、看病するのに夢中で気にならなかつただけ……」

「ヤモトさんが起きて、話をしている間に、気づいたんです」

「私じゃ、どんなに頑張ってもヤモトさんの邪魔にしかならないんだ、って……」

「ずっと逢いたかつた友達なのに、大切な人なのに。私、全然助けてあげられなくて。これからもヤモトさんは沢山戦うって、それなのに、私はこうやって、大学に通って。普通に、暮らして」

「自分だけ、安全な所に居て。それじゃ、ヤモトさんと友達じゃないみたいで……辛い事も楽しい事も、共有したいのに、私じゃ、ヤモトさんの足手まといにしかならなくて」

モーターとニンジャのユウジヨウは悲しいものだ。ニンジャは長命で、子を成す事も出来ない。モーターとどんなに共に歩みたいと願った所で、どこかで歪みが現れる。

けれど、アサリⅡサンの嘆く気持ちには、理解できた。尊い想いだ。何年もヤモトⅡサンを忘れなかつた彼女の強さは、本当に輝かしく見える。

「ヤモトⅡサンが聞いたら驚くぞ、それ。それに、色々と反論されるだろうな。アサリⅡサンはニンジャなんか関係の無い所で幸せになつてくれれば、とか、そういう感じの事

をさ」

「ありがとうございます、話したら、ちよつと楽になりました」

「そうだね」

頭の奥を漁つてみた感じ、モーターをニンジャにする方法、という物が浮かんできた様に感じる。

「俺は、君をニンジャに出来ると思う。君に戦う力をやれると思う」

「だけど、ダメだ。君が戦ったら、きつとヤモトⅡサンは永遠に自分を責めるだろう。それが、心に致命傷を与えるかもしれない程に」

「だから、ダメだ。君は、素敵な人のまま生きていくといい」

「……はい」

暗い顔を見ていると、無性に悲しくなる。

俺は、彼女を誰か、別の誰かと重ねて見ているのではないだろうか。そう思う程に、彼女は俺の心を動かした。

「納得、できないよな」

「……ごめんさい」

「分かるさ。そして、ヤモトⅡサンがちよつと羨ましい」

「そうだな！　こうしよう！」

「ヤモトⅡサンは俺が助ける！　アサリⅡサンの依頼って形でな、どうだ？」

「あなたが、ヤモトさんを助けてくれる？」

「ああ！　勿論だ！　平坦可愛いヤモトⅡサンを助けられるなら倍点、君の頼みなら更にポイント倍点だ！」

「でも……私、お金とかは」

「金じゃない。欲しいのは、君の気持ちだ」

「そ、それって」

「ああ、君みたいな素敵な人の頼みだ。報酬はそれだけで良いよ」

小刻みに震えながらも、覚悟を決めた様に目を開く。

「わ……私の事は、好きにしてください。だから、ヤモトⅡサンを」

「……いや、違うからな。そういう最低クズ女だと思わないでくれ。断じて違うんだ。

そういう意味じゃない」

「任せろ。命に代えても、アサリⅡサンの想いを形にして見せる」

「じゃあ、そういうのも含めて今から会いに行こうじゃないか！」

「えっ、どうして？」

「決まってる！」

「友達同士が離れ離れで会えなくなるなんて、悲しいからさー!」

「そうと決まったら、しつかり掴まっけてくれよ!」

普通なら疑って然るべきだ。ついこの間危険な目に遭ったばかりの女の子が、こんな唐突で胡散臭い誘いに乗る様な無防備さを見せる事自体が、まず甘過ぎるんだ。

私が、もしレズのサディストで君を前後する気だつたらどうするんだ。そうでなくても、ヤモトⅡサンへの人質に使う邪悪ニンジャだつたらどうするんだ。

でも、この子は、すっかり私を信じてくれた。こうして抱えていても、全く抵抗しないんだから。

無防備過ぎる。このマップポーの世で、どうしてこうまで純粹培養な女の子に育つか。沢山怖い思いをしただろうに。

甘い。危なっかしい。でも、でも……

ああ、どうしてこう……:こうい子に信じて貰える事が、気持ちいいのか!!

+

「あ、アサリさん?」

「き、来ちゃった。ヤモトさん」

「ああ、アサリさんを怒らなくてくれよ？ 俺が連れ込んだんだ。俺をぶん殴ってくれ
ても構わない」

「それは」

俺を殴りたいのは山々だが、アサリさんの前で暴力を振るいたくないんだろう。やっぱり、ニンジャだろうがユウジヨウは有るといふ事だ。

「何か、力になれないかな……私じゃ、ヤモトさんの助けには、なれない？」

「そ、そんな事無いよ。アサリさんが生きていてくれるだけで、アタイは、それだけで十分に救われた気分になれるから」

「こんな近くに居るのに、距離を詰めないでどうする？ ほら、そのニンジャも何とか言つてやつてくさいよ」

「ドーモ、ツワンです」

「どうも、ネザークイーンです……アータ、何？」

「何って、何だ？」

「いや、何でも……変な事聞いちゃったわね。で、ヤモトちゃんのお友達を連れ込んできて、一体何をしでかすつもりよ」

「例えば、だ」

「愛し合う二人がすれ違ったり、その仲を引き裂かれるのは物語じゃよくあるが、当事者や周りにとつちや不愉快極まるってワケだ。分かるよな、あんたなら」

「つまり、アータは、二人を会わせる為だけに……女の子一人抱えて、夜中のニチョームに來たって事？」

「そうだ。いや、だけ、なんて表現は止めてくれ。あの二人がどれほど互いを想ってるか、それくらい分かってるだろう？」

ちよつとばかり監視は有ったが、気付かれる様な失態は犯さなかつた。

アサリⅡサンが顔を赤くしてこつちを睨んだ気がした。

いや、恋人つて意味じゃないから、間違えないでくれよ。

「まあ、そうね。あんな顔見せられたら、ね」

「ああ、だろ？ こりや、年上として、ちよつと特殊な性癖持ちとしても、助けてやりたくなるじゃねえか。なあ？」

涙ぐんでいるゲイマイコに向けて親指を立てる。あ、返ってきた。どうもああいうのに弱いらしい。

「とはいえ、自治権を失ったニチョームがこのままで居られる筈も無いけどな。俺としては、アサリⅡサンを無闇にこちらへ連れてくるのは余りにも危険だと思ってる」

「だから、ほら。一度、ニチョームでの色々が片づくまで、二人は会えなくなるから……」

だから、それまでは手紙で我慢して貰わなきゃいけないから、さ」

「へえ……アータ、そういう趣味なんだ」

「ああ、まあな」

俺がユリ・クランとフ・クランのマスターである事は理解してくれた様だ。ちなみに
グランドマスターではない。

+

「おいー」

「俺はニンジャだぞ」

どうしよう、全然強いと思えないし、ヤモトⅡサンの殺気に比べたらサンシタ未満の
モータルにしか見えない。

見た感じカラテも微妙そうだし、デスノボリ重点な三倍族か、古代ローマカラテのど
ちらかなのか？

投げられたスリケンをも、人差し指で触れた。そうしたら、スリケンは簡単に砕けて、そ
の粉はゴミになるので、片手で握り込んでゴミ箱へ捨てた。

相変わらず凄い廃すべつくぼでー。オメガⅡサンやユカノⅡサンの何かを思い出す動き。カラテが溢れんばかりに溜まつてるぞ。身体の使い方が完璧に理解できてる。

「イヤーツ！」

「ぐ、ああつ！」

「グワーツ！」じゃねえのかよ！ と残念に思いながら一発殴ってみる。障子戸めいて薄いサンシタの腹部が、ちよつと殴っただけで大穴開いて風通しが良くなった。

「古代ローマカラテを拾得した俺に、技を一つも使わせないとは……何者なんだ貴様は！」

「やっぱ古代ローマカラテか」

「所詮、五つの構えを拾得した訳でもないサンシタが調子に乗りおって、貴様の様なゴミが伝統あるカラテを汚すのだ。オヒガンでお前の同類が待つているぞ。後で来るスパルタカスⅡサンにドゲザする練習をしておくべきだな」

「ま、待て、俺の後ろにはアマクダリが」「イヤーツ！」「ぐわっ！」「イヤーツ！」「あばつ！ や、やめろ。きさ」「イヤーツ！」「ごぼっ」「イヤーツ！」「あががっ!!! さよ」「イヤーツ！」「なっ?!」

爆発四散した。思わずサヨナラキャンセルしてしまった。ああいうサンシタが古代ローマカラテの価値を下げるんだ。

……つーか、ハラキリ者のサンシタに爆発四散されたお陰で、アパート使えなくなつたし……

こんなのつて無いぞ……ネオサイタマいい加減にしろよ……

俺にはカツ・ワンソーの記憶など無い。有るのは、ニュービーでも理解できる圧倒的カラテだけだ。俺ならアマクダリもザイバツも二日あれば蹂躪できるといふ確信がある。

でも、寝る場所がないのはどうしようもない。ついでに言えば、風呂にも入りたい……そうだ、センターに行こう。

+

来ました、センター。うん、普通だ。想像以上に普通だった。

「男」「女」「仏」の三つ。……三つ？ まあいいや。

眉毛が無い代わりに、茨のタトゥーを刻んである。額を大きく出して前髪を揃えた黒のボブカットで、小柄の女の子だ。

微妙に楽しそうな顔で、周りを見ている。

第六感が、ニンジャである事を察知した。というか、俺は彼女の外見を捉えて、それがエーリアス・デイクタスであると即座に理解していた。

女湯派だとは聞いていたが、本当に会うとは。俺にも予想出来なかった。

「ドーモ、隣、良いですか？」

「あ……ああ、良いぜ。どうぞ」

エーリアスⅡサンが少し横へ寄った。目を逸らしていて、あまり顔を合わせたがらない。女湯に入るのは良くて、至近距離で見るのは駄目なのか。

中身男だと分かっているけど、このかわいさは仕方が無い。悪さしたくなる。

「良い湯ですね」

「あ、ああ。そうだな」

「ネオサイタマにこんなセンターが有るとは思いませんでしたよ。最近こっちに来たばかりだね」

「そうか。俺もネオサイタマに来てからは日が浅くてさ」

「おお、そうですか。となると仲間だな。いや、結構治安悪くてコワイな町だよな、此処

はさ。センターに来るまでで何度かヨタモノに襲われたし」

「それは……大丈夫だったのか？ 幾らネオサイタマでも、表通りを通ってれば、真っ昼間からそんな事にはならねえと思うぜ？」

「大丈夫だった。何、カラテには自信有りだね。後、ちよつと裏通りを通つたのが不味かつたらしいな」

「そつか。なら良いけど、今後は危ないから止めといた方が良いいぜ。出来るだけ安全そうな場所を選ばないと、危険だからな」

「ありがと、初対面の怪しい女を心配してくれるなんて、お前さんは良いニンジャなんだな」

「お、おお。まあな………ん？」

さりげなくニンジャという単語を混ぜてみると、エリアスⅡサンが目に見えて疑問を浮かべた。

「……すると、あんたも？」

「ああ、ニンジャさ。ちなみにセンターの資金もヨタモノから徴収したんだ。ニンジャであつても生活をしていく為には資金が居る。すまん、本当にすまん、つて奴だ」

「ちなみに幾らくらい入つてたんだ？」

「それなら、ちよつと耳貸してくれ」

「……円さっ」

「お、おう」

「……わ、わりと、多いんだな」

「ああいう連中は意外と金を持つてると知れて良かったよ」

「やばい、これ楽しいぞ。ウブで弱気な可愛い女の子、しかも中身男でニンジャだ。」

「それで、だ。俺は今、泊まる所が無くてな。何かネオサイタマに良い心当たりは無いかな？ この際退廃ホテルでも構わんから、頼むよ。何か紹介してくれないか」

「初対面の相手に頼む事じゃないのも分かってるが。頼つても良さそうなニンジャはお前さん以外見かけなくて」

「収入は？」

「ニンジャハントでも始めるさ。邪悪ニンジャにハック&スラッシュを成功させれば、キンボシで収入もV字回復するだろうし……天狗にも会えるだろうし」

「は？」

「お前さんの家に住まわせて貰えると嬉しいな。何でもするぜ。何でも」

「何でも……」

「あ、胸見られた。ああ、何でも、な。」

「何だ？ 気にしてるのか。そいつは残念だな。ニンジャの身体はそう簡単に成長しな

いし老化もしないものさ」

「いや、揉めばニンジャでも大きくなる。古事記にもそう書いてある……様な」

「い、いや。俺はそういうの良から、ち、違うぜ。そんな」

「まあまあ、遠慮するなよ」

ふにふにヤッター！ やわらかヤッター！

悪魔の独白（魔法少女まどか☆マギカ「新編」叛逆の物語）

暇だった。

一言で表現するならば、そんな所だろう。私は、丘の上に置かれた椅子へ座り込んだまま、退屈に任せて鼻歌を奏でていた。何処かで聞いた様な、それでいて聞き覚えの無い音色を紡いでいる。

音と一緒に踊ろうかとも思ったが、気乗りしなかった。そもそも私が一人で踊って何になるのだろうか。ダンスを趣味にしている訳でもないのに。そんな事をしたって暇潰しにはならない。虚しくなって止めてしまう未来が簡単に想像出来る所が更に痛々しい。あるいはバママなら振り付けの練習だけで時間を潰せるかな、と私は頭の中だけで冗談を飛ばして、一人で笑う。

今日も見滝原は平穏無事に、まどかは普通に楽しくやっていた。まったく、満足感と充実感の溢れる世界だ。少しだけ胸が痛む事を加味しなければ、完璧と言っても良い。完璧過ぎて時間の流れがゆっくりと感じられるのが残念な所だが、そこは仕方が有るまい。

思索に耽る事以外、何もする事が無かった。今までの私がずっと遮二無二走っていた

為か、現状はとても退屈だった。こんな時、遊び相手も居ないのは厄介だ。友人の居ない我が身を嘲笑すると同時に、溜息を吐いた。退屈な自嘲など、虚しい限りだ。

草むらが風に揺れる。今日はインキュベーターすらも現れない。こんな時くらい居ても良いと思うが、よく考えると邪魔なだけなので、別に要らないかとも思う。

悪魔になった時は酷く忙しくなると覚悟していたのだが、蓋を開けてみると、暇な物だ。魔獣は魔法少女が倒しているし、まどかは安定しているし、美樹さやかも記憶を取り戻していない。その上、インキュベーターは監視済み。勉強は繰り返しの中で大学生くらいまでは予習を済ませてあるし、宿題は五分で終わってしまった。つまり、何もする事が無い。

つくづく、自分はまどか一辺倒の人間なのだ実感させられた。まどか以外には趣味も特技も好きな物も無いので、まどかが平穩無事に過ごせる世界を手に入れると、一気にやる事が無くなってしまう。朝起きて学校へ行ってお弁当を食べて家に帰って寝る、という文面そのままの生活だ。クラスメイトとは滅多に会話を行っていないし、まどかなど言うまでもない。

正直、これは覚悟していなかった。まどかと敵対する所までは考えていたのだが、まさか、それより先に退屈の方が襲いかかってくるとは。

どうせ暇なら自動車の免許でも取ってみようかしら、なんて思ったけど、まだ自分は

中学二年生だった。魔法でタンクローリーの運転だって出来たんだから、簡単に出来るんじゃないかと思っただけで、甘い見通しだろうか。

そういえば、退屈しのぎに書いて三日で飽きた日記があった。取り出して、読んでみる。たった三日分、合計で三行にも届かなかった。まどかが楽しそうだった。まどかに友達が出来たらしい。まどかが授業中に寝ていた。言葉にしてしまえば、ただそれだけだった。

これでは単なるまどか観察日記だ。私の記憶がきちんとまどかの存在を刻み込んでくれるので、余計に書く事が無かった。

小さく溜息を吐き、伸びをした。じつとしていたので、血行が悪くなった気がする。こんなにダラダラと一日を過ごすなんて、昔の自分は夢にも思っていなかった。というか、悪魔になってから数日間までは想像もしていなかった。

本当に、今までの自分は走り続けていたのだと思い知らされる。最初の、魔法少女となる前から、私はまどかだけを見て、まどかの背中に追い付こうと必死に走っていたんだ。それが今や追い付いてしまったので、後は逃げ切るだけである。良い事かもしれないが、私にとっては最悪だ。人間、燃え尽きるとこんな風になるんだろうと思うくらい、今の私は率先して動くべき理由を失っていた。

そうだ。私の全存在はまどかに集中している。今までもそうだったし、これからも変

わらない。では、私にとって、まどかとは何なのか。今更な思考だったが、時間だけは腐る程に有ったので、何となく考えてみる。

恋愛対象。友愛対象。親愛対象。形容すべき言葉は沢山有るが、何もかもを入れて、愛だ。ただ、今の自分が何を考えているのかは、自分自身でもよく分からない。私はまどかをどうしたいのだろう。人間として生きて欲しいのは当然として、そこから先だ。無論、まどかは普通の生き方をするべきだとは思ってるけど、その普通の生き方とはどんな物だろう。自分はお世辞にも普通とは言えない人生を送ってきた。魔法少女になつてからの私は、特にそうだ。だから、私自身の感覚は多分、かなりズレている。これでは、まどかの人生を見誤ってしまう危険性が有るだろう。気をつけないと。

それにしても座り心地の良い椅子だ。普通の、ありふれた木製の椅子なんだけれど、お尻が痛くなる感じはしない。何処で買った物だったかな。思い出せない。悪魔になつたつて家具はお店で買わなきゃいけないし、お弁当は自作しなきゃいけないんだから、お店の名前はちゃんと覚えておかないと。

暖かな風が頬を通る。もう夜だし、寝た方が良いだろうか。悪魔が夜に寝る、というのも不思議な話だ。しかし魔獣と戦う使命も持たない私にとって、特に起きている理由はない。

いや、と。考える。そもそも、私は悪魔なのだろうか。確かにあの時、私は自分の事

を悪魔だと思ったし、自称した。美樹さやかも、私の事を悪魔だと言った。しかし、本当にそうだろうか。まどかは真に神にも等しいのだろうか。聖なるものだったか。いや、そんな事は無かった。確かにあの子は優しく、素晴らしい性格をした子だが、だからって神にも等しいのだろうか。違う。

まどかが神などと、戯言を抜かしてはいけない。あの子は人間だ。人間だからこそ、人間としての幸せを受ける権利が有る。その人間を貶めて蝕むのは、やはり人間ではないだろうか。自己弁護なんて無様な真似はしないけれど、ふと、そんな取り留めもない事を考えてしまう。

何となく、学校の鞆に手を入れて、『悪魔』の項目を調べてみる。が、最初の一文を読んだ所で止めた。これは参考にならないだろう。多分、あの白い宇宙生物の事が頭に思い浮かぶ様な事が書いてあるだろうから。

悪魔といえば契約だけど、この場合、まどかと契約する事になるのだろうか。それは冗談じゃない。なら佐倉杏子か美樹さやか辺りでも誘惑すれば良いのか。まどかの周りでトラブルを起こすのは望む所ではないから、却下だ。幾ら暇だからって、そんな事をする意味はまるで無い。

やる事がまるで無い生活というのは、充実している様で虚無感も強い。いや、今の結果を満足はしている。誰が何と言おうと、私は遠くからまどかの姿を見ていられるだけ

で十分に幸せだ。まどかが居ない世界で散々苦しんだ自分にとって、まどかの実在は何より歓迎すべき事実だ。例えまどかの幸せの中に私が居なかつたとしても、それは贅沢な程に幸せだった。ただ、やる事が無くて暇なだけだ。

リボンを巻いた私が居たら、羨むだろうか。何もしない私を蔑むだろうか。繰り返しの私の私が居たら、羨むだろうか、まどかに干渉した私を怒るだろうか、それとも賞賛するだろうか。メガネを掛けていた頃の私ならどうだろう。想像も出来ない。あの頃の自分は、すっかり失われてしまったのか。とはいえ、昔から今に至るまで、私の気持ちは一貫してまどかへの愛情に注がれている。性根が変わらないのだから、どのほむらも最後には私と同じ結論に至るだろう。

余裕が有る為か、色々とどうでも良い事を考えてしまう。何か趣味でも見つけた方が良いかもしれない。と言つても、何か良いアイデアを思いつく訳でもないのだ、今、こうやって誰も居ない丘の上で座っているのだが。まあ、それは良い。

何だったら、まどかの観察でも趣味にしようか。あんまり退屈だったので、そんな事まで頭に浮かび上がってくる。しかし、折角現世にまどかが居るんだからそれも有りだ。今の私は曲がりなりにも悪魔を自称しているのだし、それくらいやつても不思議ではない。昔なら遠慮が前に出たと思うけど、魔なる者なんて名乗っている自分には、そんな謙虚さは要らないだろう。

ただ、傍に居て監視した方が良いのか、遠くから眺めていた方が良いのか。それは分からぬ。まだ、自分は行動を完全には決めかねている。

まどかは楽しく日常を過ごせているだろうか。友達は沢山出来ただろうか。美樹さやかとも改めて友好を結べたのか。いや、結べているのは確認したが、昔の様な親友関係になっっているのか。ご飯はちゃんと食べているか。久しぶりの日本で戸惑う所も多いただろうけど、もう慣れてくれただろうか。考えてみれば、まどかに関して注意しておくべき事は数多く有る。しかし、いざとなれば私だって助けになれるかもしれないし、御家族や美樹さやかと一緒にいるのだから、きつと大丈夫だろう。

不安は有つても、危機感は余り無かった。この世界は安定しているし、私が動くべき事もそうそう起こるまい。あの子は強いし、良い子だ。普通の困難なら、周囲の手を借りて何とかするだろう。まどかから相談を受けるであろう美樹さやか、羨ましい様な気がする。

これからの私は、こうやって暇だ、退屈だと言いながら、ゆっくりとまどかの人生を眺めていく事になるだろう。その後の事は考えない様になっているが、まあ、まどかの子孫やその血縁を追いかけるのも悪くは無い。その頃には、私の中に有る葛藤も迷いも、ちゃんと解決出来ている事を願う。

でも、まどかはきつといつか、記憶を取り戻すだろう。弱気な事は言いたくないけど、

私がまどかに勝てるとは思えないし、何かの拍子で戻ってくる日が訪れるに違いない。

もし、その日が来たら。まどかは、私を殺すのだろうか。きつと、無理だろう。あの子は優しいから。有り得るのは美樹さやか辺りだが、彼女だって人殺しには向かない。だとすれば杏子か、マミか、ベベだろうか。それとも見知らぬ魔法少女であろうか。殺されるなら、出来ればまどかの腕の中で死にたいな、と思う。勿論、殺されたってまどかを犠牲にする世界に戻す気はないけど。

私がどうなろうと、その点を曲げる訳には行かない。まどかの犠牲で成り立つ世界など、在ってはならない物だ。別段、決意を新たにしているつもりは無い。前から考えている事を、今も考えているだけだ。私はまどかを愛しているのだから。

気が済んだ。退屈凌ぎの思索だって、それなりに時間は使える物だ。そろそろ、家に帰って寝よう。

まどかはもう眠っただろうか。寝顔の一つでも見に行こうか。どうせ変わらない日常だ。少しくらい本当に悪魔らしく、悪戯の一つでもしたって構わないだろう。

テンプレ勇者が世界を救った後には、闇が広がっていたのです（オリジナル）

子供のころ、勇者の話をよく聞かされた。

私の家は人より少し貧乏だった。街の子供なら誰もが持っていた物語の本、それが私の家にはなかった。

今も昔も、子供が見るのは勇者の話だ。ヒーローとも、もしかすると主人公とも言われる人の物語。時には情けなく、時には面白く、時にはカッコいい。そんな勇者の話が、子供はみな大好きだった。

でも、私はその本を持っていなかった。

そんな時、助けてくれたのは兄だ。

兄は友達から借りた勇者の本を持ってきてくれた。その時の私には文字は読めなかったから、兄が代わりに読んでくれた。

その時だけは、兄がまるで英雄のように思えた物だった。

兄は楽しそうに本を読んでいた。時々、読み聞かせるのを忘れてしまう事があるくらいだった。

悔しくて、私も文字を覚えた。その時には、もう本は家にあつたけれど。

私は勇者の物語が好きだった。周りが少し大人になって、私も少し大人になって、でも、勇者の物語が好きだった。

毎日の様に読みなおした。勇者が作った学校に通いながら、勇者が考えた数字や文字の勉強をして、そして帰れば勇者の本を開いた。

時々、魔王の物語も読んだ。兄はこちらの方が好きで、私は勇者の方が好きだった。

何度も、本当に何度も読み返した。表紙が無くなった時は少し泣いた。でも、また読み返せば涙は無くなった。

また少し周りが、私が大人になって。勇者の話をしなくなった頃、私はやっぱり読んでいた。読む度に、読む度に思っていた。

本物の勇者に出会った時、私は何を思うのだろう。そう、思っていた。

十

本物の勇者なんて、いないのかもしれない。

そう思ったのは、いつだっただろう。

「こんにちは」剣を軽く引く。「さようなら」

それだけで人が倒れた。

倒れた人の姿は、どこか遠い世界の出来事に見える。殺しはしていない。ただ、気絶

させたただけだった。

しかし、悪い事をしてしまったかもしれない。罪のあるなしは関係無く、無関係の相手を傷つけるつもりは無かった。これは、仕方のない犠牲だ。

そのまま放置しておけば、誰かが見つけるだろう。まだ息があるのを確認し、壁際に運ぶ。

軽く、頭の中だけで謝って、警備の居なくなつた扉に近づく。ドアノブに罫は仕掛けられていない。中の様子も、魔法を使えば簡単に判明した。

屈強そうな見張りに反して、中にはたった一人しかいない。きつと、それで十分だから、なのだろう。

何年もかけた目的の最後、それがこの中にある。そう思うと、心が弾んだ。自然に鼻歌が溢れだし、そのまま窓へと視線が向かう。

「誰もいない部屋に色はあるのかな。誰も見ていない場所には、場所なんて、あるのかな」

ただ役者が演じているだけの舞台には、観客のいない世界には、いつたい、何の意味があるのだろうか。

ずっと前から考えていた疑問の答えは、今も出ない。きつと死ぬまで出ないだろう。

「私達は、なに？」

答えはでない。

答えは、ない。

「あれは、なに？」

窓の外に広がる世界は、私が小さな頃よりもずっと薄暗かった。

煉瓦の家々が並ぶ横には、灰色の大きな建物があり、近くでは列車が蒸気を噴いていた。工場からは煙が出て、霧のようだった。

どれも、私の両親が子供の頃にはなかった物だ。発展した技術の結晶が、何も隠されずに鎮座していた。

子供の私にとって、剣と魔法が世界の全てだった。だというのに、目の前に広がる世界は、どうにもそれとは遠く見える。

私がおかしいのか。それとも、別の何かが狂ったのか。それは、分からない。

ただ、私は扉を開けた。一気に部屋へ飛び込むのではなく、ゆっくりと。大きな金属製の扉が音を立てて開き、部屋の様子が目でも分かるようになる。

少しの本と剣が置かれているだけの、何も無い部屋。その奥にいる勇者が、大きな椅子に座って私を出迎えた。

「よく、来たね」

勇者は派手過ぎず、地味でもない黒の服をまとっていた。黒い髪は無造作に切られて

いて、とても高い位の立場にいる人間とは思えない。

良くいえば型破り、悪くいえば、常識外れだ。これが三十年ほど昔であれば、きっとそう言われただろう。

「黒い髪に染めさせたんですか？」

少ない言葉だったが、勇者はそれを理解した。

「そうだ。周りの髪色を変えれば、俺の髪色に変には見えなくなるだろう？」勇者は意外そうに私を見つめた。「よく知ってるね」

「本で読みました」

そうだ。彼とは初対面だが、どんな人生を送ったのかは知っている。

黒い髪、珍しい肌の色。美形とも言えない程度の、そこそこの顔立ち。話で聞くよりも少し年をとっていたけれど、私の知る人だと分かる。

「俺の本を読んだか？ 照れるな」

「それは嘘ですか？」

「そう、嘘だ。でも勘違いしないでくれ。昔は本当に照れくさくて、嬉しかったんだ」

勇者、元勇者は椅子から立ち上がり、こちらへ近づいてくる。

剣にそつと力を入れた。ただ相對しているだけでも、危険な相手だと体が分かっている。自分の意志とは関係無く、全身が警戒をはじめていた。

「これで二十人目の暗殺者だ」

「しかも女ばかり？」

「半分は男だった。もちろん、斬ったよ」

「残り十人は生かしたんですか？」

「二人は斬った。毎回毎回、俺の足下にも及ばない連中を送ってきて、まあ、お陰でよく眠れた」

武器の一つも持たないまま、彼は私をじつと見つめている。人形を見るような、冷たい瞳だ。

試しに最低限の動きで首筋へ剣を振るった。首に刃が食い込む寸前で止めたが、何の反応もな

た。……いや、反応している。彼は剣の流れを目で追って、指が何かを握る形を作っていた。

目には何も見えなくとも、そこには剣がある。既に私を間合いへと入れて、いつでも私の首を落とせる姿勢を取っている。

させるわけには行かない。とっさに彼の手の甲を蹴り上げていた。

そこに握られていた透明の物は確かに弾き飛ばされ、壁を引き裂いた。そして、裂かれた壁が黒い色に塗られて消し飛び、外の景色が明らかになる。

「どうも、今回はワケが違うらしい」

景色を見て、勇者は肩を竦めた。

外に立ちこめていた煙の臭いが部屋に充満して、私達の姿を仄かに隠す。

それでも、お互いの目はしっかりと見えていた。

「狙う人が多くて、大変そうだね」

「鬱陶しがられるのさ。勇者なんてやってたからかね」

「違う」

思わず顔を乗り出してしまった。

確かな隙になっただろうに、私は斬られていない。その事に気づくより早く、声が勝

手に溢れ出す。

「あなたは、勇者じゃない」

勇者、勇者だと言われている人は一瞬だけ目を見開き、細める。

目元がどこか嬉しそうだった。

「そうだ。俺は勇者じゃない。俺は、ただの地球人だ。少し、まあ、少し強い力を貰った

だけの、単なる、普通の。そう、普通の」

「大変そうだね」

「君みたいなのが殺しに来るから困ったな」

本当に困った様子で、彼は頭を掻いた。命の危機を感じているのかも怪しいくらい、若々しく緩い表情をしている。

勇者の年齢からすると、五十代か四十代の後半だろうが、やはりそうは見えない若さだ。

これも、異世界の加護という物なのだろうか。

「そういう評価は嬉しいな。普通の人間扱いしてくれる奴は少ないんだ。普通の人間だと思つてはいるんだろうが、扱いがどうにも」

「凄いなと思われているみたい？」

「そうだな。それだよ」

勇者らしき人は私へ背を向けた。それから煙まみれの世界へ腕を広げて、溜息を一つ。

「確かに、俺は魔王を倒したって功績はあるんだ。冒険も、仲間もいたよ。本を読んだなら知つてるだろう？」

「沢山の女の人もね」

本で読んだ事を告げると、彼が振り向いた。

「ここに来てはじめて、影の無い笑い顔をしている。」

「そう言うな、若かったんだよ、俺も」

「気づかなかった癖に」

「あの時、思い切つて女遊びにでも目覚めておけば今みたいにはならなかつたと思うか？」

「女として、素直に気持ち悪いと思う」

顔を押しさえて、彼が思い切り笑う。

喉が枯れるのではないかと思つてしまふくらいに、激しい笑い声だつた。

斬ろうと思えばいつでも、斬れる。ただ、私にはできない。その笑い声には少しづつ絶望が混じり、殺気まで漏れだしていったからだ。

「俺はこの世界が嫌いだ」

笑いが止まつた時、彼は不意に呟いた。

「ああ、最初は、よかつたよ。達成感、これから頑張らなきゃな、つていう使命感、俺の知識はこの為にあるつて義務感もあつた」

ただ、と彼の声が響く。

「無性に、帰りたくなつたんだ」

とても年齢相応とは思えない、そんな弱々しい声だつた。

この視界に広がる世界は、彼にとつてはどんな風に見えるのだろうか。少なくとも、私には昔よりも色あせて見えた。

「向こうには未練なんか無かったんだけどな、ただ、向こうの文化が恋しくなった。世界そのものが恋しかった。それから、地獄だったな」

「ホームシック？」

「嫌な言い方だな。ただ、周りの物が、今までは輝いていたものが急に無価値に思えてきただけだ。俺は舞台上で踊っていた役者で、ここは劇が終わった後のセットなんじゃないかとすら思った。俺は片づけられるべきだったんだ」

彼は自分の指を壁に押しつけた。すると、その指は簡単に壁を歪ませて、どんどんとめり込んでいく。

一瞬で指を引き抜くと、また違う位置へ指を押しつけた。十秒もすれば、壁には数え切れないほどの穴ができて、一部分が崩れ落ちていた。

「帰れないなら、せめて、できるだけ俺の知る世界を再現しようと思った。でも無理だったよ。それが原因で来たのが、君か？」

「その通り」

「そうか。ああ、そうか」

私の返答を、彼は嘸みしめる様に聞き入れている。

私の気持ちなど全く、少しも理解していないだろうに、彼は私を哀れんでいた。

きつと、毎日のように他人を哀れみ、助けていたからこそ、この人は勇者と呼ばれた

のだろう。本の中の彼と同じ姿は、ほんの少しの喜びを与えてくれる。

「何があった？」

「教える義理はないし、教えたって何か意味があるわけじゃない」

「もしかすると、力になれるかもしれないぞ？」

命乞いではなく、心からの言葉だった。

息を吸うのと同じくらい、自然と他人を助ける言葉を吐く。やはり、彼はかつての勇者だ。

だが、今も勇者というわけではない。

「あなたに助けられて、あなたに感謝して、もしかするとあなたに惚れたりするの？」

気持ち悪い、と一言で断った。

自分の気持ちは自分だけの物なのだ。他人に委ねた時点で死んでいるも同じだった。

そして、私は助けではなく、自分の満足が欲しいだけだ。

そんな事を言うのと、どうだろう、目の前の人間は深く頷き、私の頭を軽く叩いた。反応できる動きだったが、反撃はしなかった。

「もう俺は勇者じゃないし、物語の主役でもない」

口元に無理矢理な笑顔を浮かべ、彼は親指を立てる。

「今は、君が主役だ。だが俺を殺せば君もきつと舞台から降りなきやいけない、何を成し

遂げたって後には空虚な物しか残らない。無意味な物さ。特にこの世界はな」
「そうかもしれない」

空しいだけの瞳が私を貫いている。

背筋が凍り、緊張が走った。それでも、私の心を貫ける程のものはない。ただ弱く、ただ意味が無いだけの視線だ。ひたすら冷たいが、それだけだ。

「私はやる事を変えたりはしない。あなたは斬る。斬って終わらせる」

彼は笑っていた。心から安心した風に笑っていた。

「そうだな。なら、早くしてくれ。今までは怖くて死ねないし、死なせてくれない奴らが俺を見張ってたんだが、お前が全員殺してきた、そうだろう?」

「殺してはいないよ。ただ、あなたは殺す」

「ああ、それはいいな。その意志、ラスボスを前にした主人公、って奴。素晴らしいね」
彼はその場に座り、私が首を切り落とせる位置で姿勢を固定した。

いつでも良いのか、もう目を瞑って、どうでも良さそうに力を抜いている。あまりにもやりがいと感慨に欠けた姿を見ると、剣に力が入ってしまう。

「座っていないで剣を取って。魔法を使って。全力で抵抗して。これが私のラストステージだから」

数歩下がり、彼を待った。

彼はどうしようもなく残念そうな、捨てられた子犬のような目で私を見つめた。だが、私が首を振って答えると、肩を落として立ち上がった。

「そうか、うん」

「本気できて。感慨深い最後にしたたい」

「それは良いけど、負けないでくれよ。言われた通り全力で勝ちに行くが、はつきり言っ
て負けない。耳も目もとつくに閉じた。口を嚙むのは無理だったから、命ごと閉じるつ
もりだ」

そう言ったとき、彼の雰囲気は激変する。残念なまでに空虚だった気配は猛毒のよう
になり、隙が完璧に失せた。どんな手を使っても反撃を受けると容易に想像がついた。

目には見えない剣なのか、もう何かを握っている。ゆつくりと腕を上げる、ただそれ
だけの一つ一つの動作が、どんな化け物よりも力強い。

剣は見えなくとも、その体から溢れるオーラは見える。この都市全てを覆う勢いで、
とても死にたがりとは思えない。

まさに、私の希望通りの全力で振る舞っていた。話で見た通り、いや、それ以上の結
果を見せつけていた。

「あなたは」

目が輝きそうになり、押さえつける。その代わりに口元に笑みを作り込んで、滅多に

他人には見せない満面の笑顔を彼へ送った。

「あなたは私の、憧れだった」

「よく、言われるよ」彼は無表情で吐き捨てた。「そしてクソくらえ、だ」

そして、彼は動く。私を斬る為ではなく、死ぬ為に。

私もまた、動いた。彼を斬る、のではない。私が納得する為に。

+

余韻に浸りながら帰ってみれば、家の鍵が壊されていた。

一気に頭が冷えて、ほぼ全壊してしまった剣を握る。限界だったらしく、剣は崩れ落ちてしまった。

長年愛用してきた剣だ。柄の彫刻が愛らしく、お気に入りのお品だった。

地味だが、深い胸の痛みが心を襲った。

「どうしたの?」

その場で立ち尽くしていると、清楚かつ値段の高そうなドレスを着た令嬢が私の家から顔を出した。

「剣が」

「壊れたの？　なんて言うか、酷いわね。あなたも酷い有様だし」

私の顔につけられた幾つかの傷は、かなり深くまで届いている。血は既に止まったものの、確実に後に残るだろう。

服は何とか略奪してきたが、体の方は魔法で焼かれ凍らされ電気が流れ木が生え、最後には内側から爆発したりと、回復魔法で強引に治したとはいえ、皮膚の一部が言葉にできない状態になっている。

確かに、酷い有様だった。ただ、頭は多幸福感が広がって、自然に機嫌も良くなってくる。

「何と戦ったのよ。古代のドラゴンとか？　魔王でも復活した？」

「すぐ分かるから、内緒」

左手の人差し指で口元を押さえた。無意識にやってから、これが、元々はこの世界になかった水草だと気づいて、幸せが少し削がれる。

「楽しそうね？」

彼女のバカにしたような言葉も、祝福の祈りに聞こえた。

「気持ちよかった。今までの人生の集大成が綺麗に収まったら、きつとああいう気持ちになれる」

「私は無理だったけれどね」

肩を竦め、彼女は乱暴に座り込んだ。軽めの体重でも、人の重さに椅子は軋んだ。

溜まっていた埃が舞っている。目が良いのは、時に不便だ。

「ずっと掃除をしていないから、そこに座ったら服が汚れるよ」

「汚れ役だったんだし、それくらい許してよ」

ひらひらと手を振りながら、彼女はテーブルの上に置かれた錠前の残骸を手を取った。

強引にひきちぎったのだろう、鎖ではなく、鍵穴が二つに裂かれている。それを私に見せつけ、文句を言ってくる。

「強度が不足していたわ。次からはもつと魔力の込められた一流の品を買うこと。安全は無料で配ってくれる物じゃないんだから」

「あなたの元居た場所と違って、水は無料で配ってくれるけど」

「安全はこつちの世界の方がまだお高い買い物になるわよ。ああ、向こうの電子ロックが懐かしい。十八年暮らしたけど、やっぱり便利さはまだまだだね」

そう言いながら、片手で金属の錠前を軽く握りつぶしている。

誰が素手で鍵を、鍵穴を二つに分けられるだろう。できたとして、誰がそんな事をしようと思うのか。見た目とは裏腹の握力に、思わず口がひきつった。

「いつもいつも、勝手に家へ上がり込むのはやめて」

「鍵が脆いのが悪いんじゃない？」

「素手で鍵を壊して家宅侵入をする令嬢はいないと思う」

「百年に一人くらいいるでしょ、たぶん」

潰れて小さくなった錠前をゴミ箱へと放り捨て、彼女が顔を机へ押しつけた。けだもののに唸り声を出していて、片目だけを私へと向けている。

「誰にも見られていない部屋には何も無い。誰かに見られているから部屋には物があると思える、なんて言ってたでしょ。あなたの部屋を見てあげたんだから、感謝して欲しいくらいだよ」

「屁理屈だね」台所に溜まった皿を指さす。「どうせ勝手に入ってくるなら食器を洗っておいて欲しかった」

「私のこの、洗い物なんてしたことなさそうな素敵な指が食器を洗えると思う？」

彼女の指は労働を一度も経験した事の無い物だった。白く、傷は一つも無く、丁寧に磨かれた爪が装飾も無しに光っている。

その癖、拳は鋭く振る舞いに隙がない。地面を殴り込む訓練を毎日こなしているのも

知っている。

「あなたの拳は荒いもの。洗い物くらいできる」

「できないわよ。もう十八年以上洗濯すらやらせて貰えない立場なんだから」

機械に魔力が流れて、人の声が響いた。それは最新の魔導放送機械、ラジオ、とか言うらしい。

彼女が隠れて購入し、私の部屋へ勝手に置いていった代物だ。音楽や事件の報道が流れてくるが、あまり興味はない。

道で拾った新聞を開くと中から土が床へ落ちて、彼女はあからさまに顔をしかめた。

「あなたもこつちを楽しめばいいのに。結構ノスタルジックな気分になれて良いものよ？」

「新しい機械の話は分からない」

「私にとつてはずつと昔の機械よ。私の知ってる物より機能も少ないし、放送局は一つしかないんだもの。まだまだこんな程度の物じゃ懐かしむくらいしか出来ないわ」

四角のラジオには触角が付けられている。何かの役に立つわけでもないが、何故か付けられている。

そんな触角を指でなぞりながら、彼女は報道を聞き入っている。

黙っていれば高貴かもしれない美貌が、その報道の内容で少し崩れた。誰かが殺害さ

れたと聞こえた時、彼女の表情はついに険しい物へと変わった。

「物騒ね」

「だね」

適当に流したつもりだったが、声に幸せが乗っていたのは否めない。

思わず、本棚に置いた一冊へ目が行く。付箋が幾つか貼られた、それなりに汚れた本だ。

そんな私とラジオを、彼女が何度か見比べた。そして、目を丸くした。

「もしかして、あなたが？」

彼女は私の顔を見つめ、口元を押さえた。

その質問に答える気にはならなかった。本棚からその一冊を取り出し、中身を読むフリをする。それだけで、彼女は全てを察するだろう。

私のそんな態度を、彼女はじっと見つめている。心なしか空気が少し重苦しくなっている気がした。

自然と剣を握ろうとしたが、生憎と粉々に砕かれていて、持つ事すら不可能だ。彼女と全力で戦うには、やや不安のある状況といえる。

警戒を深めていると、彼女が疲れきった雰囲気です息を吐いた。

「まさか、あの人まで斬ってくるなんてね。まだまだあなたを見くびっていたみたい」

「本当に気持ちよかった」

「それはもういい」

うんざりした様子で目を閉じて、彼女は深く息を吸う。

空気を自分の中でしつかりと取り込み、吐く時にはすつかりと全身を落ち着かせていた。

「でも、終わったのね」

「終わったとは言えない。でも、区切りは区切り。剣もこの通りだし」

そう、一区切りがついたのだ。少しは肩の力も抜けるという物だ。

剣が砕けてしまったのだけは残念だけど、それもまた区切りの印に思える。そう思わなければ、悲しくなってしまう。

「私の剣が」

「その、悲壮な表情はやめて」

「剣が」

お気に入りだったのに、と呟くと、余計に気分が落ち込んだ。特別な品ではないけれど、いつも一緒に居たものだから。

刃が完全に砕けては、修理も不可能だろう。自分の体よりも丁寧に手入れをしていたのだ、片腕が無くなったのと等しい痛手だ

「分かったから。直してあげるから、そんな顔をするのはやめなさい」

「直せるの?」

一度だけ頷いて、彼女は私の剣の残骸を手を取った。

魔法的な何かが素早く発動し、剣の周囲を緑や青の光が覆う。それらは時間を巻き戻すように剣の破片を移動させていき、元の形を作り上げていく。

ほとんど一瞬の出来事だったけど、私の目は、きつと彼女の目にもその光景は見えていた。

「ほら、完成」

手渡された剣に触れてみると、完成した剣は前よりも鋭さを増していて、内側から仄かに柔らかな光を放っているのが感じ取れる。

「ついでに魔法もかけておいたけど、駄目だった?」

「駄目じゃない。ありがとう、結婚しよう?」

「あなたが男だったらちよつと心が揺れたかもね。でも、あなたが欲しいのは剣の修理をしてくれる人でしょ」

「どうせあなたは一生結婚できない。列車より早く走つたりお城の柱を素手で叩き折つたり地面を殴つたら爆発するような令嬢と結婚する人はいない」

「だからってあなたと結婚してどうするの。モテない女同士の傷の舐め合いでもあるま

いし、あなたこそ素敵な人を見つけないよ。私は見つけたわよ」

自慢げに胸を張っているが、虚勢にしか思えなかった。

なぜなら、何度会わせるように催促をしても、彼女は首を横に振るからだ。今回も、そうだった。

「あなたの運命の相手に会ってみたい。やっぱり駄目？」

「何度も言ってるでしょ、だめな物はダメ。第一、私だってあなたの殺害対象でしょ、弱みなんて見せられないわ」

「そうだけど」

そこで誤魔化さないのがあなたね、なんて言っている。少なくとも、私の目では彼女が何を思っているのかは見抜けない。

どうしても彼女の虚勢を崩してみたくなるが、そこはぐつと我慢する。剣を直した礼として、今日はこれ以上の追求はしない。

「あなたを斬るのは最後。私がおばあちゃんになって、死にそうになったら」

ほんのりと殺気も漂わせた言葉を、彼女は楽しげに聞き入れた。

「それは、一生友達でいてね、っていう、宣言？」

「その通り。よく分かかってるね」

「勝手なのね」

「どう生きてても無意味なだけだって、勇者が言ってた。だったら私は勝手にするだけ」
言葉が自然と浮かび上がってきた。

あの勇者らしきものの言葉を、私は自分で思う以上に重要な物として見ていたらしい。

彼の言葉と意志は私に伝播したのだ。こういう事を、何とこのだったか。向こうの言葉では、そう、ミーム、とか。

「本当に勝手なんだから」

頭の底から単語を絞り出せたからか、彼女の話聞いていなかった。

どうやら、気づかない間に会話が殆ど終わっていたようだ。

「話が変わるけど」と彼女が持参した紙袋を手にとつて、机の上に置いていた。

「美味しいケーキをお土産にもつてきたの。果実が沢山入っていて、堅い生地がサクサクしていて美味しいのをね」

「食べる。ありがとう、ちょうど運動後の甘味が欲しかったところ」

朝も気合いを入れて生クリームを加工済みの砂糖の塊で挟んだ物を二つ食べた。死ぬほど甘い以外の感想が一つも浮かばなかった。

しかし、激しい戦闘で甘味が不足している。そこに甘味を置かれれば、猛獣のように心が吠える。

「最低の甘党ね。食事制限とは無縁そうで羨ましいわ」

「あなたも」

「元の世界だと悩みの種だったのよ。ストレス以外じゃ痩せられなかった事が無かったんだもの。ストレス社会だったから太りもしなかったけど」

そんな話には興味が無い。机の上の紙袋だけが、私の救い主に見える。

中身がケーキだと分かれば気配を感じることが出来る。それは確かにケーキで、美味しそうで、甘そうで、毒は入っていない。

昔はこういう嗜好品も少なかったそうだ。その点は、感謝したい。

「良いところのケーキなのよ。あなたの手持ちじゃ買えないくらいの値段」

「胸がきゅんとする話だね」

「時々崩れるわね、あなたって」

バカにされているのは分かったけど、それよりもケーキが食べたい。食べたい、そう、食べたい。

「でも、条件が一つあるの」

「何」

なにをいうんだ。食べさせろ。などと、そんな風な顔をしていたのだろうか。

彼女は少し怯んだ。しかし、すぐに紙袋を私から引き離し、意地悪そうな、そう、本

当に意地悪な令嬢のような喜びに歪んだ表情となった。

「歩きながらも食べられるタイプの物だし、せっかくだから一緒に歩きましょう？
きつとあなたのせいでみんな大混乱している所よ、見にいって、その光景を楽しみなが
ら二人でお茶の時間よ」

「悪趣味」

「子供の血のお風呂に入ってた貴婦人がいるんだもの、野次馬根性の令嬢くらい居ても
問題ではないわね」

開き直った風な彼女を見ると、面白くなつて自然と笑ってしまう。

私が笑うところを見せるのは、いつぶりだったのか。彼女は驚いて、それからすぐに
私を指さして大笑いした。

とても失礼な女だと思った。

+

この世界が大嫌いだと勇者は言った。

私は、この世界は最低だと思っている。

こうして親しい人と歩く度、私は何度もそう思う。

左右のどちらを見ても同じような建物が並び、奏者もないのに音楽が流れ、私達の姿を覆い隠すほどの人間がひしめいている。

私の横を誰かが通り過ぎた。それは人間ではなく、魔法で作られた生物だった。彼女の隣を誰かが通り過ぎた。それは生物ですらなく、人型のゴーレム……アンドロイド？ だった。

それは何かの指示を出されたようなぎこちない挙動……プログラム？で私達に会釈をし、流れるように去っていく。

それらも、やはり私の姿を見てすらいらない。

当然だ、彼らは意志を持っていないのだから。

やせ細った人が倒れている横で、魔導ゴーレムが忙しそうに仕事をしている。

意志を持たないものが、意志を持つものを上回っている。

この世界は、魔法が飛び交い魔王と人の戦いが繰り広げられた世界は、とうに終わっている。

通りにはゴーレムが歩き、絶滅寸前のゴブリンやオークの子供が売りに出されていた。ペットとして、需要が確かにあるそうだ。

近い内に規制されるそうだが、それが何の慰めになるのか。彼らはもう、一つの人間

と戦う魔物ですらない。保護されるべき別の生き物になってしまった。

ここは、かつてもつと綺麗だったらしい。

命は命として、魔法は魔法として、剣は剣としてそこにあった。多数の犠牲と悲鳴の上に英雄が立ち、語り継がれる物語を作り上げてきた。

私にとって、ここは最高の物語の舞台だった。

だというのに、人は彼らもたらした物を受け入れた。その結果が、これだ。

誰がこんな世界を作ったんだろうか。

勇者か、向こう……異なるどこからの来訪者か、人か、神か、それとも運命とやらか。いずれにせよ、なんて悪趣味なのだろう。

ああ、あの勇者は本当に勇者だった。この世は無意味だ。そんな悲観的な一言が、頭から離れない。

彼の言う通り、終わった舞台は片づけなければいけなかったのだ。今はもう、ただ空虚で無意味な世界でしかない。

今、この手の中にあるケーキも。文化を、文明を侵略された結果に生まれたものだ。忌々しくも愛おしい。その気持ちは、食べてからもさして変わ

……ケーキが美味しくて、どうでもよくなった。

アイはさだめ、さだめは悪魔（魔法少女まどか☆マジカ）

お茶とお菓子を持って部屋を開けると、ほむらちゃんがベッドに頭を寄せていた。

「ほむらちゃん？」

部屋に入って声をかけても、ほむらちゃんの反応はない。床に座ったまま、ベッドにもたれて、頭を斜めに倒している。

ほむらちゃんは、わたしに気づかないままベッドに寄りかかって、近くにあつたぬいぐるみを掴んで抱きしめると、「まどかあ……」なんて寝言を口から出した。

「わたしはここに居るのになあ」

でも、夢の中でもわたしの事をちゃんと考えてくれるのは嬉しい。大切な友達だと想われているんだって、実感できた。

トレイを置いてほむらちゃんの側に寄ってみるけど、やっぱり目を覚まさない。

「ほむらちゃん、わたしはここだよ？」

声をかけてみる。

起こしちゃうのは悪いかとも思ったけど、ちゃんとした場所で寝ないと、ほむらちゃ

んの髪が痛みそうだった。

「起きてっ？」

「……」

ゆさゆさと揺すってみても、ほむらちゃんは寝息しか返さない。

よつぽど疲れたのかもしれない。わたしの勉強を一日中ずつと見ていてくれて、わたしが休憩している間も、何度も教科書を見直して、どういう教え方がいいのか、じっくり考えているみたいだったから。

頑張ってくれたんだから、起こしちやいけない気もする。だけど、せめてベッドの上で寝ないと起きた時に身体が痛い。

「ほむらちゃん、ベッドの上で寝よ？」

「……」

「じゃあ、ちよつとごめんね……」

ほむらちゃんの両脇をもって、持ち上げてみる。

「ん、しょ……つと………無理かな？」

幾らほむらちゃんが軽いからって、意識のないほむらちゃんを抱き上げるのは無理だった。

諦めて床に降ろしても、ほむらちゃんの反応はない。幾ら何でも眠り方が深すぎて、

このまま目を覚まさないんじゃないかって、少し不安になる。

「起きる、よね……？　心臓の病氣、とかじゃ、ないよね……？」

ほむらちゃんの胸に手を当てて、鼓動を確認してみると、ちゃんと、規則正しい心臓の音が伝わってきた。

お風呂上がりの体温も、きちんと暖かいままだ。

少なくとも、ほむらちゃんは生きてる。

「よかった……」

それだけで十分だった。今までの不安が、急に見当違いな妄想みたいに思えてきた。

なんだか恥ずかしくなってきた、ほむらちゃんの姿を見る。もし起きていたなら、恥ずかしい所を見せちゃったのかもしれない。

でも、やっぱりほむらちゃんは眠っていて、その顔立ちも、いつもとは違った雰囲気に見えた。

「……ほむらちゃんの髪って、本当に綺麗だよね」

こうして見ると、ほむらちゃんはカッコいいより、かわいい子だった。

全身を足先から見ていくと、羨ましいくらい細い脚と、手の先が目にと留まった。あまり意識する事はなかったけど、爪の形がとても丁寧に整えてある。

もう少し上を見れば、ほむらちゃんの髪があった。ストレートなのに、実は癖がある

髪。

いつも良い香りがして、毎日のシャンプーをどれくらい頑張ったらこんなに綺麗になるんだろうって、気になっている。

「起きないと、ほむらちゃんの綺麗な髪、三つ編みにしちゃおっかな……」

ちよつとしたイタズラがしたくなって、ほむらちゃんの髪に手を伸ばしてみる。

これくらいなら、ほむらちゃんも笑って許してくれる筈。

「まどか?」

「あつ……ご、ごめん! つい気になっちゃって! ……あれ?」

ほむらちゃんの声だった。

けど、目の前のほむらちゃんは目を瞑ったままだ。口だつて寝息を立てているだけで、ほとんど動いていない。

でも、聞こえてきたのは確かに聞き慣れたほむらちゃんの声だった。

「ほむらちゃん、起きてるの?」

もう一度、軽く揺すってみる。けど、ほむらちゃんは目を開けない。ただ寝苦しそうな息を漏らすだけで、やっぱり。

「寝てる、よね……腹話術、とか?」

そんな特技があるとは、聞いた事がなかった。

でも、ほむらちゃんだから、そういう事を秘密で練習していても不思議じゃないんじゃないか、そんな風に思っってしまう。

「違うわよ。私はそこまで器用じゃないわ」

「でも、ほむらちゃんは凄い人だから、頑張つて腹話術ができる様になつちやつたりして」

「無いわ。というか、必要がないからできる様にならないわ」

「えー……え？」

わたし、誰と会話をしているんだろう。

ほむらちゃんはやっぱり寝ている。なのに、どこからかほむらちゃんの声が聞こえてきて、わたしの言葉に伝えてくれた。

「まどか、もしも私の困り顔が見たいなら、起きている時の方がいいわよ。私が困るだけで済む事なら、まどかには決して怒らないから」

今度は、その声がよく聞こえた。後ろからだ。

わたしの後ろに、ほむらちゃんと同じ声をした誰かが居る。

「あなたは、誰なの？」

「振り返れば分かるわ」

ほむらちゃんの声は、わたしの耳に優しく届く。でも、決してほむらちゃんが喋って

いる訳じゃない。

ちよつと怖い。でも、振り返らないといけない気がする。どうしてか分からないけど、ちゃんと、見なきゃいけないと思う。

そつと、怖いと思いつつ、後ろを見た。

「……ほむらちゃん？」

「そうね、暁美ほむらよ」

そこにはほむらちゃんが居た。優しい笑顔でこちらを見ていて、髪をゆつくりとかき上げていた。

思わず、寝ているほむらちゃんの顔と、後ろにいるほむらちゃんの顔を見比べる。どつちも同じくらい美人で、同じくらい穏やかな表情だ。

でも、服と、もう一つ、大きく違う所があった。

「ねえ、その胸の所……」

「これかしら？ 気にしないで、そういう物なの」

そのほむらちゃんは、胸の真ん中に黒い穴が空いていた。

清潔そうな真っ白い服を着ていて、それがとても似合っているのに、その穴だけがあの凄く違和感を放っている。

ほむらちゃんの姿をしている様には見えただけ、人間には見えなかった。

「……あなたは、ほむらちゃんなんだよね？」

「そうよ。でも、細かく言えば少し違うかしら。その辺りの説明は、彼女を起こしてからにしましょうか」

そのほむらちゃんは、私の横をゆつくりと通り過ぎて、眠っているほむらちゃんの前
に立った。

ほむらちゃんはひどくうなされていた。よつぽど怖い夢を見ているのかもしれない。

「待ってて、まどか」

「何をするの？」

「私を叩き起こすのよ」

そのほむらちゃんみたいな人が座り込み、ほむらちゃんの耳元へ口を近づける。

そして、何度か小さく声をあげて、どこかで聞いた覚えのある声で喋りだした。

「あ、あー、あー……ほむらちゃん？ 私だよ、マドカだよ？」

びくつ、と震えて、ほむらちゃんが一段大きな呻き声をあげた。

ほむらちゃんが苦しめられている様にしか見えない。

ただ、止めようとする手で押さええられた。

「ほむらちゃん、早く起きて？ 寂しいよ……助けて、ほむらちゃん……」

「う……」

ほむらちゃん目の目がゆっくりと開き、何度か目を擦って小さな欠伸をする。

あんなに起こそうとしても起きなかったのに、ほむらちゃんは言葉一つかけられただけで起きあがった。

「まどか、ごめんなさい……今、起きるから……泣かないで……」

何度か眠そうな顔をしながら目をちゃんと開けると、ほむらちゃんらしき人を見て、目を丸くした。

「……え？」

「けふ……やつと起きたわね。マドカの声、なかなか似ていたでしょう？」

一度だけ咳をすると、ほむらちゃんらしき人の声は、元に戻っていた。聞き覚えがあると思ったら、わたしの声真似だったんだ。

「あ、あなた……一体」

「分からない？」

わたしが不思議な気分になっている内に、ほむらちゃんはすっかり目を覚まして、飛び上がる様に立ち上がっていた。

ほむらちゃん表情が一気に警戒で染まっていた。

一瞬で殺気立った怖い顔になり、わたしの前に素早く立って、守ろうとしてくれる。

武器は持っていないのに、戦える準備はできている。そんな雰囲気だった。

でも、もう一人のほむらちゃんが敵には思えない。

「待ちなさい。そうそう簡単に人を始末しようとする物じゃない。第一、私は魔法少女の敵じゃないわ」

わたしが止めようとするより早く、もう一人のほむらちゃんが首を振った。

それでもほむらちゃんは信じなくて、険しい声で問いかける。

「じゃあ、あなたは何だというの」

「私は……そう、私は……アイよ」

もう一人のほむらちゃんは、そう名乗ってから考え込んだ。

その仕草も、表情もほむらちゃんとそっくりだけど、何か、どこかが違った。同じ人なのに、同じ人じゃなかった。

「そうね。私が生まれた理由を考えると……」

アイちゃんはわたしとほむらちゃんの顔を見比べると、何か思いついたのか、わたし達二人を指さした。

「端的に言えば、貴女達の愛の結晶？」

ほむらちゃんが固まった。それはもう、石になっちゃったんじゃないかってくらい、唐突に動きが止まってしまった。

その姿を見ていると、アイちゃんの言っている事の意味がわたしにも伝わってくる。

飲み込める様になってくる。

「え、えええっ！　ちよ、ちよっど!？」

完全に飲み込めた時、わたしは思わず叫んだ。

「そ、それって、つまり、わたしと、ほむらちゃんのこと？」

「娘よ」

アイちゃんは真顔でそう言った。

「……悪い冗談ね」

やっと歯車が動き出したのか、ほむらちゃんは少しぎこちない動きで髪をかき上げ、わたしに聞こえる程度の大ききさで深呼吸をした。

まだ警戒は解けていない。むしろ、悪い冗談を言われてちよっと怒っている様な声をしている。

「本当は何なの？　場合によっては」

「私を始末する気？　やめておいた方がいいわよ」

「……どういう事」

「私の姿を見ていれば、分かるでしょう？」

アイちゃんが腕を広げて、全身をほむらちゃんに見せつけた。

しばらく、ほむらちゃんはアイちゃんをじつと見つめた。横目で見ても難しそうな表

情で、でも、その表情は少しずつ柔らかくなっていく。

ほむらちゃんはわたしの手を握って、また一つ、深く息をした。

「……そういう事」

「ど、どういう事……？」

ほむらちゃんには何が見えたんだろう。

凄く聞いてみたい。そう思っていると、アイちゃんがわたしに声をかけてくる。

「私はね、暁美ほむらの一部。大切な友達を信じて想う気持ち、そして、その気持ちから生まれた力が形を持ったもの」

アイちゃんが一步近づいた。

その顔色はとつても理知的で、優しそうで、ほむらちゃんの素敵な表情が全部詰まっている様だった。

疑う余地もないくらい全部がほむらちゃんだけど、どこか、ほむらちゃんより余裕が感じられる顔つきだった。

「まどか。暁美ほむらを思う貴女の気持ち、貴女を思う暁美ほむらの気持ちと繋がって、私が生まれたのよ」

そこまで言い切ると、アイちゃんが胸を張ってわたしの前に立つ。

「えっと、つまり……ほむらちゃんの心なんだよね？ 分離しちゃったの？」

「そうね。貴女が暁美ほむらの心に触ったから、私が生まれたのかも」

「え？ ……あつ」

さっきの、心臓を確認した時の事かもしれない。

わたしが声を漏らしたからか、ほむらちゃんがわたしに目を向けた。驚いた顔で、「まどか？」と戸惑った声が耳に響く。

「へ、変な事をしたわけじゃないよ。えっと、違って。そうじゃなくて……そうだ！ あの、ほむらちゃんの心、何だよね。分離しちゃって大丈夫なの？」

話を逸らすと、ほむらちゃんが首を傾げている。

助けを求めてアイちゃんの顔を見ると、わたしに向かって頷いてくれた。

「ええ、そこは大丈夫よ。一度実際に分離した事があったけど、その時も暁美ほむらは精神的にかなり疲弊したのと、魔法が使い難くなる程度で済んだから」

「あれ、それはまずいんじゃない？」

「前回はね、あの時は色々と立て込んでいたから。今回はちよつと事情が違うの。暁美ほむらと私が分離していても、暁美ほむらが戦えなくなる程度の弱体化を起こす訳ではないわ」

そういう事じゃなくて、ほむらちゃんが精神的に追いつめられる方が嫌なのに。

その気持ちを分かってくれているのか、アイちゃんはわたしに笑いかけて、首を振つ

てくれた。

「問題ないわ。まどかが側に居さえすれば全くの無問題なの」

「……それならいいけど」

わたしの声を聞いた時、アイちゃんはとても嬉しそうに目を細めた。優しく、暖かくて、思いやりがあつて、本当に、ほむらちゃんとそっくりだった。

「よかった。じゃあ、私を認知してくれるのね」

でも、その言葉は予想の遙か斜め上を行った。

「……認知!?!」

「ええ。二人の想いから生まれたのだし、やっぱり子供としては、両親に自分を認知して貰いたい物じゃないかしら」

やっぱりアイちゃんは真顔だ。冗談めかして言ってくれば良かったのに、どう見ても本気の表情で、しかも、どこか願う様な声をしていた。

ほむらちゃんの顔を横目で見てみると、固まるのを通り越して、時間が止まっている。口を小さく開けたまま、目は見開いたまま、わたしが見ているのも気づいてない。

認知。その言葉の響きが強すぎて、頭の中で考えていた事が全部吹き飛んでしまった気がする。

「に、認知って、でも、ほむらちゃんと、その、子供を作った覚えはないし」

「まどかが知らない間にわた……曉美ほむらが出産したのよ」

「……ほむらちゃんか？」

例えば話だと分かっているとしても、思わずほむらちゃんの顔を見つめてしまった。

固まっていたほむらちゃんも、そこでわたしの視線にきづく。

わたしは、どんな顔色をしていたんだろう。ほむらちゃんは悲しそうに目を細め、ちよつと泣きそうな顔になった。

「まどか。お願いだから信じないで……」

「でも事実よ。二人とも気づかなかっただけで」

アイちゃんの澄まし顔の言葉に、ほむらちゃんは顔を上げた。

「……まどかをこれ以上惑わすのはやめなさい」

ほむらちゃんの声はもの凄く重くて低い。

でも、アイちゃんは全く怖くないのか、ちよつと笑い混じりにほむらちゃんへ顔を近づけた。

「産んだ方だから、あなたの事は……ほむらママと呼んでいいかしら？」

「……やめなさい。それじゃまるで……」

「まどかを汚した様……かしら？」

「つ……私自身にしては、無駄口が多すぎるわね」

ほむらちゃんの声もつと低くなる。

横に立っていても分かるくらい、本気で怒っているのが分かった。今にも爆発する寸前の危険さだ。今まで見たほむらちゃんの中で、上から数えた方が早いくらい恐ろしい霧囲気を身に纏っている。

このままじゃ大変な事になるんじゃないか。ほむらちゃんがほむらちゃんじゃなくなる様で、怖い。

思わず、ほむらちゃんの手を強く握った。

「まどか?」

「そんなに怒っちゃダメだよ」

「……」

少し考えて、ほむらちゃんはわたしの腕を抱いた。

わたしの表情が気になったのかもしれない。じつとこちらを見つめると、目線を下げた落ち込んだ霧囲気になる。

「ごめんなさい。怖かったわよね」

「ううん、大丈夫だよ」

ほむらちゃんが落ち込みすぎない様に、笑いかけた。

すると、ほむらちゃんの表情が緩んで、不安そうな霧囲気が消えて無くなった。

今日のほむらちゃんは表情がとても分かりやすい。いつもは静かに緩やかに、どんな時でも何でもない事みたいに変わるのに、今日はやけにリアクションが激しい。

「ふふ」

「アイちゃん？」

「しょうがないのかしら。認知は諦めるとするわ」

自分の希望が通らなかつたのに、アイちゃんがどこか嬉しそうに諦めを口にする。

「その、ごめんね」

「いいえ。まどかは気にしなくていいわ。ねえ、ほむらママ？」

「本当にやめて、気味が悪い」

気持ち悪い物でも食べた様な声。ほむらちゃんの、今まで一度だって聞いた事のない
声音。

それはとても物珍しくて、こんな声も出せるんだ、と驚いてしまう。

でも確かに、自分とそっくりな人にママ、なんて言われたらビックリするかもしれない。産んだ覚えがないんだから、余計にそう思う。

「わたしも、流石にまだママは早いかな……」

「そうよね」

ほむらちゃんが頷いてくれる。

でも、そのママ、って言う響きだけは少しだけ気持ちよかった。

いつか、誰かとの間に子供ができたら、わたしもそう呼ばれる。そう考えると、ちよつと想像できない途方もない世界が広がっている気がした。

ただ、わたしにはやっぱりまだ早い。今はまだ、遠すぎる言葉にしか聞こえない。

「アイちゃんには悪いと思うけど、ちよつとね……それならまだ、お姉ちゃんの方が嬉しいかな」

「まどかには弟さんが居るものね。やっぱりママは抵抗がある様だし……そうね……」

アイちゃんはしばらく考え込み、意を決した様に声を続けた。

「まどかお姉ちゃん？ ……こう呼べばいいのかしら」

その時だけはアイちゃんがわたしより少し小さい身長に縮んだ。気がした。

大人びたほむらちゃんの声でそんな風に言われると、明らかに無理をしていると思ってしまう。だけど、そんな風に言われるのも。

「……いいかも」

「まどか。それは、ちよつと」

「う、うん。分かっている。ごめんね、お姉ちゃんはやっぱり無しで」

「ええ。私が言うのも何だけれど、どう考えても無理があるのだし……」

「だ、だよね」

何より、友達にそんな呼び方をさせているのが恥ずかしい。

でも確かにいい気分だった。まるで、わたしがほむらちゃんのお姉さんになったみたいで。かなり無理があると分かっていたけど、ちよつとした優越感があった。

「それにしても、アイちゃんの呼び方は、このままアイちゃんでもいいの？」

「Iでも愛でも好きに呼んでいいわ。暁美ほむら、でもいいけれど……呼びにくくて面倒よね」

「面倒じゃないけど、やつぱりどつちのほむらちゃんか分からなくなっちゃうのは困るかな。うん、今まで通り、アイちゃんって呼ぶね」

「それでいいわ。分かりやすいし……座ってもいいかしら」

「あ、どうぞ」

アイちゃんはベッドに座り込んで、わたし達が片づけた宿題とノートを楽しそうに眺めた。

それはとても自然体で、アイちゃんの不自然な胸の穴も気にならなくなるくらい、人らしい顔つきだ。

だから、かもしれない。変な状況だったけど、不思議と受け入れられた。ほむらちゃんが居て、アイちゃんが居る。それが当然の様だった。

ほむらちゃんもそう思ったのかもしれない。小さく息を吐くと、わたしの隣に座り込

んで、わたしが置いたトレイの上から、カップを一つ手に取った。

「まどか、お茶を貰ってもいいかしら？」

「うん、もちろん」

ママさんから教えて貰った作り方で淹れた紅茶。

お休みの日に一日中探して見つけたマカロンも付けて、ママさんの家でする様なティータイムを作ろうと、頑張ったつもりだ。

ほむらちゃんは喜んでくれるかな。ちよつと期待しながら、わたしもカップを手にとった。

「……あつ、冷めちゃってる……」

触つてみると、紅茶がすっかりぬるくなっているのが伝わった。

温かい内に飲んで貰おうと気合いを入れていたのに、すっかり忘れてしまっていた。

ほむらちゃんは気にしていないけど、少しカップを触っていると、どうしても気になつてくる。

「ごめんね、ちよつとお茶を入れ直してくる」

「そんなに気遣わなくていいのよ」

「ううん。アイちゃんのも作るから、ついでに温かいのを取り替えるだけだよ」

せつかくママさんから教えて貰ったんだから、最初の一回目でぬるいを出すのは嫌

だ。

それに、カップは二つしかない。アイちゃんの分も作らなきゃいけなかった。

「私にも作ってくれるのね。ありがとう」

「アイちゃんは好きな物とか、あるのかな」

「私と暁美ほむらは同じだから、味覚も同じよ。まどかの好きにして」

「よかった。じゃあ、ほむらちゃんと同じ物を持つてくるね」

「まどか、私も手伝うわ」

ほむらちゃんが腰を浮かせた。

でも、わたしが手を軽く振って止める。

「大丈夫だよ。ほむらちゃんはアイちゃんと二人で待っていてね」

わたしがそう言うと、二人はお互いの顔をおずおずと見つめ合った。同じ様に固い表情をしていて、そっくり過ぎた。

やっぱり、お互いに何か抵抗があるのかもしれない。

二人は仲良くできるのかな。ちよっと心配だったけど、わたしはそのまま、部屋を出た。

+

二人が紅茶を口につける所を、わたしはしっかり見届けた。

ちゃんと飲んでくれている。味は確かめたつもりだけど、不安は不安だった。

「……どうかな？」

「美味しいわ。まどかは私の事をよく分かってくれているのね」

「良かった。アイちゃんは？」

「もちろん同じ意見よ。まどかつて、紅茶も美味しく淹れられるのね、素敵よ」

「い、いやあ、ママさんから教わっただけだし……えへへ」

ちよつと照れくさくなっていると、ほむらちゃん達はごく自然に紅茶をもう一度飲んで、同時に「本当に美味しいわ」と言ってくれた。

本当、絵になる二人だと思う。紅茶を飲んでいる所だつて、わたしが同じ事をして子供が背伸びしているみたいに思われちゃうけど、ほむらちゃん達がすると、本当に似合う。

でも、ほむらちゃんとアイちゃんの間には、ちよつと距離があつた。というより、ほむらちゃんがアイちゃんを避けていた。

少し気になつたけど、今は二人とも嬉しそうな顔をしているし、触れない方がいいのかと思う。

「マカロンもどうか。結構選んだつもりなんだけど……」

選び抜いたマカロンは、わたしが食べる分には凄く良かった。紅茶とも合っていた。

ほむらちゃん達も喜んでくれるかな。そんな期待をしながら見ていると、ほむらちゃんがつくくりとマカロンを手にとった。

そのまま、半分だけ小さく口を開いて食べてみると、一瞬だけ凄く驚いた表情になって、すぐにわたしへ笑いかけた。

「とっても美味しいわ……これ、高かったんじゃないかしら」

「そうでもないよ?」

これはちよつとだけ嘘だった。

一番合う味の物を買おうとしたら、結構な値段の物になってしまった。

でも、気にせず食べて欲しいから、それは秘密にする。

「そうなのね。でも、こんなに美味しいのを見つけてくるなんて、まどかは凄いわね」

「そこまで褒められる事じゃないよ」

「いいえ、ちゃんと考えてくれたのが分かるもの。紅茶もお菓子も、今まで食べてきた中で一番美味しいかもしれない」

ほむらちゃんが喜んでくれて、わたしも嬉しかった。

作って本当に良かった。この紅茶も、この嬉しさと一緒に飲み込めば、いつもより何倍も美味しく感じられそう。

「……………うーん」

「まどか？」

「あつ、えつと……」

それでも、まだまだママさんの作る紅茶には遠いと思う。

ほむらちゃんも心から嬉しそうに飲んでくれたし、それが嘘だとは思えないけど、やっぱり自分だとまだちゃんと納得はできない。

「実を言うとな、紅茶はママさんから教わったばかりだから、まだまだ始めたばかりなんだ」

「そうとは思えないくらい上手よ」

「ううん、まだまだだよ。ママさんと比べちゃうと全然だし……だから、ちよつと考えたんだけど」

「ええ」

「ほむらちゃんも、次は一緒に作ってほしいな。二人なら上達も早くなりそうだし……どう？」

「そうね……家ではコーヒーが多いから、紅茶を作れる様になるいい機会だわ」

紅茶をじつと眺めてから、ほむらちゃんは快くそう答えてくれた。

嬉しくて、思わずほむらちゃんの両手を握る。

「やった！じゃあ、次にママさんの家に行く時は、ほむらちゃんも一緒に来てくれる

？」

「巴さんの……」

それまでは明るかったのに、少しだけほむらちゃんの表情が曇った気がする。

マミさんと一緒に作るのが嫌なのかな。マミさんの事、嫌いなのかな。わたしの友達
が、わたしの大好きな先輩を嫌っているとしたら、それはとても悲しい事だった。

そんなわたしの不安をほむらちゃんは分かってくれて、首を振って答えてくれた。

「いいえ。確かに教わる相手としてはちようど良いでしょうね。でも、私が行っても大
丈夫かしら」

「大丈夫だよ。マミさんならきつと優しく教えてくれるよ」

「……そういう意味ではないのだけれど」

ほむらちゃんは複雑そうな顔をしていたけど、すぐに「でも、まどかが私とやりたい
のなら、頑張るわ」と笑いかけてくれる。

「ありがとう、ほむらちゃん」

「いいえ。むしろ、私を誘ってくれてありがとう」

「ふふ、一緒だね」

握った手を離さず、じつと顔を見つめていると、ほむらちゃんは恥ずかしそうに目を
逸らした。でも、しばらくすると、ゆっくりとこつちを見てくれる。

二人で一緒に笑うと、ほむらちゃんと友達になれて本当に良かったと思えた。
「ふふっ」

機嫌の良さそうな声が聞こえてくる。それはほむらちゃんの物とそっくりで、でも、やっぱりどこか違う。

アイちゃんの笑い声は本当にほむらちゃんとそっくりなのに、どうしてか、別の人の様に聞こえてくる。

「アイちゃん？」

「あら、私はお邪魔だったかしら」

「そ、そんな事ないよー」

アイちゃんは本当に穏やかな笑顔でこちらを見ていた。

わたし達の事を見ながら紅茶を飲んで、マカロンを食べていて、機嫌よくカップをトレイに戻している。

「まどかが幸せそうで本当に良かったわ」

その言葉は少し恥ずかしい響きだったけど、そう言われたのはとても幸せな事だと思える。

だって、アイちゃんはほむらちゃんなんだ。ほむらちゃんが、そう考えてくれている。大切な友達にそう考えてもらえて、凄く嬉しい。

「うん、わたしは幸せだよ」

「そう……まどかは、かわいいわね」

「えへへ、アイちゃんだって、かわいいよ」

真つ白の服と綺麗な肌が抜群に似合っているし、その胸の穴だって、慣れれば不思議な魅力がある。

いつものほむらちゃんとは少しだけ違って、でも、そこが大切だと思えた。

「だ、そうよ」

「まどか……その……ありがとう」

アイちゃんは平然として、ほむらちゃんが代わりに照れた。

どうしてほむらちゃんが照れるんだろう。そう考えると、すぐに答えは思い浮かぶ。

「あ、そ、そっか。そうだよ。二人とも同じほむらちゃんなんだもんね」

「そうよ。私への言葉は暁美ほむらへ、暁美ほむらへの言葉は私へ届くの」

アイちゃんはほむらちゃんを指さし、ほむらちゃんはアイちゃんを指す。

二人は息が合っていた。同じ人と言うだけあって、仕事だってほとんど同じで、わたしに優しい目を向けてくるその気持ちも、ちゃんと伝わってくる。

ほむらちゃんの中にアイちゃんが居る。

その事実、とても不思議で、まったく現実的じゃない。普通の人は、自分の心の一

部が形になったりはしない。

でも、こうして見ると受け入れられる。事実がちゃんと伝わってくる。そう考えると、アイちゃんの事が今までよりずっと気になってきた。

「……ね、こうしてアイちゃんが表に出てくるのって、これが最初なの？」

「ある意味では二度目よ。ただし、私はその事を覚えていないわ」

ほむらちゃんが首を傾げた。

「……記憶にないわね」

「あなたは忘れているでしょうね」

でも、とアイちゃんは続ける。

「あの時は本当に色々大変だったのよ。私が動かざるを得ない状況だったし、かなりの無茶もしたわ」

「どんな事だったの？」

何があっただらう。過去を思い返すアイちゃん表情は、喜びとも、悲しみとも言えない物だった。

だから、どうしても気になって尋ねてみたけど、アイちゃんは首を振る。

「秘密よ」

「……そう言われると気になっちゃうかも」

「なら、一つだけ。あえて言うなら暁美ほむらの人生でも五本の指に入るほど精神的に危ない目に遭わせた、かしら」

「本当に大変だったわ」という独り言が印象的で、余計に気になってしまう。

わたしでも気になるんだから、ほむらちゃんはもつと気になるだろう。何とか思い出そうとしている様だけど、結局は何も出て来ないみたいで、諦めの息を吐いていた。

「やつぱり、思い出せないわ」

「そうでしょうね。でも私は覚えてる。あの時のあなたの言葉も決意も、ちゃんとね」
自分の知らない自分の話に、ほむらちゃんは無表情で答えた。

でも、それはいつものカッコいい表情とは違う。何も答える言葉が出てこないから、言葉の代わりに浮かべている表情に見えた。

「……なら」

ほむらちゃんの雰囲気は少しだけ変わった。無表情から、少し険しい笑顔に、穏やかな空気は、少しだけ引き締まっていく。

「なら、私の……その、アレも、あなたが協力したの？」

「……ええ。あなたも知つての通り、とんでもない奇跡を起こしてしまったわね。後悔は……」

アイちゃんが聞けば、ほむらちゃんは一瞬だけブルリと震えた。

そして、わたしの顔を見ると、手を握って小さく笑う。

「そんな物は最初から無いわ」

「そう」

二人はお互いに頷き合って、一緒に口を閉じた。

「二人とも、秘密の話？」

「ああ、まどかは」

アイちゃんがわたしの後ろに素早く回り込んで、肩を優しく、でもしっかりと掴んだ。遅れて、ほむらちゃんが後ろから抱きついてくる。

「まどかは、気にしなくていい事よ。ねえ」

「ええ、まどか。私達の個人的な話なもの」

同じ顔をした二人が掛け合いを続けながら、わたしの肩や腕をぎゅっと抱きしめる。

まるで、ほむらちゃんに包み込まれている気分だった。暖かくて、ちよつと気持ちいが良かった。

眠りについたナチュラルボーン百合リアルニンジャが目覚めてセイジを鍛えなおしたりバイセクターがカラテする予定だったもの

私の眠れる日が来た。

準備は完了、眠るには良い日だ。邪魔をする者も、割って入る者も居ない。私にとつては丁度良く、この様な場所を発見出来た幸運に感謝の念を覚えるばかりだ。

見上げると、そこには岩が有る。左右も、足下もだ。そこに大きなフートンを敷くと、寝台に早変わりである。少々湿気が強いが、それほど気にならない。

そろそろ眠ろうとフートンに入る。目を覚ますのは何時になるのか。我らが祖の目覚める日であれば、良いのだが。

「もう眠るのか」

目を瞑った時、その気配は瞬時に近づいて私へと話しかけてきた。ユウジョウを感じて、私は身を起こす。そこに居たのは、背の高い女だった。その胸は少々羨ましい事に豊満だった。

「まあね。疲れたのさ」

「お前らしいな」

彼女は肩を竦めながらも、こちらへと近づいてくる。私の寢床は見つかつていたらしい。

私の真横へ座ると、彼女は後ろで縛つた髪を軽く撫でて、胡座をかいた。

「お前とは、長い」

「確かにね。君には随分と酷い目に遭わせられた。研究者としての行動は良いが、私を巻き込まないで欲しかったよ」

「ハハ、そう言うな。お陰で研究が捗つたからな、それに、毎回しつかり対価は渡しただろう?」

「まあ、確かにな」

何度も私を殺しかけたが、まるで悪びれない。そんな悪友の姿に、思わず笑みが漏れた。

前のイクサの時も、私達はそんな風に殴り合つていた様な気がする。私は一瞬のカラテで、彼女はトビゲリで、相手を殺す気は有つたが、そこには確かなユウジョウが有つたのだ。彼女が私の居場所を見つけ出すのも、当然の事だと思えた。

「それで、わざわざ就寝直前の私を起こして、君は何をしに来た?」

「友の眠りを見届けに来た、と言つてはいけないのか？」

「駄目だな。君がそんな善良で優しい人かと言われると、違うだろうに」

彼女は小さく肩を竦めて、その知性に溢れる目を伏せた。静かな物で、いつもイクサの中で見せた強烈な強さは、どこか儂くも見える。

いや、これが彼女の素なのだろうか。ニンジャの中を駆け回った女狐にしては、妙にゼンを感じる。

「お前は私の知る中で一番恐ろしいニンジャだからな。本当に眠つたのかを確認しない限り、恐ろしくて近寄れん」

「人を我らが祖の様に言うなよ。私など非ニンジャとそう変わらんさ。しかし眠い」

欠伸を一つ。すると、意外な物を見た様に彼女は目を見開き、クツクツと笑う。ジゴクの釜底すら溶けそうな悪女には見えない。

「全く馬鹿だな、本当に馬鹿だな。お前が非ニンジャ？ 馬鹿を言うな、お前はオバケだ」

「む、言うに事欠いてオバケとは何事だ？ アクマ・ニンジャならまだしも、私は単なるニンジャの一人だぞ。しかも、こんな美人に」

まったく失礼だ。彼女はこれだから困るのだ。

私はニンジャの中でもモータータルに近く、心も若い。近頃の連中みたく思い上がった二

ンジャの様な何かとは違う。

「第一、オバケと言うならお前はどのようなんだ？ ニンジャ六騎士の一人だろうが」

「その六騎士もお前には散々に手を焼かされた。あの時、世の中にはニンジャすら手に負えない怪物が居ると思つたよ」

「私だつて、気を抜くとトビゲリを仕掛けてくる女は怖かつたね」

視線が僅かに交差する。視線のカラーテが衝突し、殺気が混ざり合つた。

昔なら、ここでイクサを始めた所だ。しかし、今の私達はもう年齢相応に落ち着いている。先に笑い出したのは彼女の方だった。昔はもつと血の気の多い奴だったのだが。

一頻り笑うと、彼女は楽しいげな様子のまま、指を向けてくる。

「……お前が眠るとなると、いよいよ私も去らなければならぬか」

「影響力が強すぎるからなあ」

「そうだ、奴ら私が邪魔らしい。キョート城に秘めたアレの制御が出来るのは私だけだ」というのに。今回の研究が終われば、後は追放だろうな」

嘆かわしそうな溜息を吐いて、彼女は忌々しげに虚空を見つめた。

言いたい事は伝わってくる。他人事ではないのだ。

「気持ちに分かる。私もいい加減に面倒になつたからね。祖の頃より衰え枯れ果てたニンジャ未満を見るのももう飽きた。今度は祖が目覚めた日か、あるいはニンジャの居な

「世を走りたい物だよ」

「それは無いな」

即座に言われてしまった。

「おや、何故？」

「お前がそんなに纏まった世で生きる筈が無い」

きつぱりと言いつつ切られ、啞然としてしまう。だが、すぐに笑いがこみ上げてきた。あの邪悪な女が、どこか不貞腐れた様に言ったのだ。これが面白くて仕方がない。

声をあげて笑ってやった為か、また彼女の機嫌を損ねた様だ。だが、別に構わなかった。それで良い。別れはこれくらいで良いのだ。

また、会えるのだろうか。ほんの僅かな不安は、口に出さない事にした。代わりに彼女の頬に触れ、思い切り気分良く別れるのだ。

「では、また会おう……ドラゴン・ニンジャⅡサン」

私の手を下ろすと、彼女は、ドラゴン・ニンジャは何も言わなかった。ただ、背を向けた。

そのまま消えていくかと思ったが、彼女は一度足を止め、一言だけ呟いた。虫の羽音の様に小さな声だが、耳に届いた。

「ユウジヨウだ、イタカⅡサン」

その言葉は、私にとっては嬉しい物だった。

どれだけ長い付き合いだっただろう。その間に何度もイクサを繰り広げたが、最後には良い関係で居る事が出来た。

共に旅をし、

同じ物を見て、

同じ物を作り、

カラテをし、

チャドーを教わり、

私は私のカラテを教えた。

今ではもう数の減った、最も古いニンジャの一人だ。当然の事ながら、私は彼女の事が大好きだった。数少ない女のニンジャで、一番の親友だ。

「ああ、また会いたいな」

精一杯の想いを乗せると、ドラゴンが振り向こうとした。しかし、思い留まった。

ドラゴンは決して振り向かず、手に振って、颯爽と駆けていく。まだ、外でやる事が有るのだろう。まだ眠る気も無いのだろう。

相変わらず面白い女だ。

彼女が知覚の範囲外に出た事を確認して、私はもう一度目を瞑る。

これは、長い眠りになるだろう。この目を開けた時、世はどうなっているのだろうか。その時、ドラゴン・ニンジャIIサンが居たら、世の中を案内して貰おう。きっと彼女の事だから、色々な事を知っている。

少し、楽しみに思った。

+

一人のニンジャが立っていた。

彼は赤黒の装束を身に纏い、静かに地下の迷宮を歩んでいる。そのメンポには「忍」「殺」の文字が。

洞窟だ。彼にとっては良い修行場の一つである。

赤の炎が

カラテによって振動が響いた。

崩れた壁の先に、何やらニンジャめいた文様が刻まれている。まるで封印だ。

「フーツ」「随分眠ったが、カラテは衰えていないな。いや良かった」

「ドーモ、ニンジャスレイヤーです」

「ドーモ、イタカです」

+

「貴様、どこから現れた」

「私が聞きたいよ。何だ、人の安眠を邪魔しておいて」

「ニンジャ殺すべし！」

「やってみろ、モーター」

よく分からないが、ニンジャを殺したいらしい。であれば私は抵抗するまでだ。

炎が私を包む。

「ハハハ！ ニンジャの屑め！」

ジツを使うまでもない。

どうも放っておけない。成る程ニンジャを殺すと嘯くだけあつてカラテは鍛えられているが、まだまだ完全ではなかった。

「グワーツ！」

「……弱い！」

「全く酷いモーターだ、ニンジャに挑むのは良いが、もう少し奥ゆかしさという物をだな」

「こ、こんな事では……貴様アー！」

「ええいつ、まったく面倒な子だな！」

「付いてこい！ インストラクションを授けてやる！」

「貴様」

「強くなりたいのだろう、さっさと来い！」

町並みは猥雑で、何が何の役目を果たしているのかも理解出来ない。

「案内せよ」

「……」

「私は、案内せよと言ったのだが？」

自分でも横暴な気がしたが、そこはインストラクションと引き替えだ。

+

「何の為のカラテだ。戦う意味は何だ、理由は？ 何でも良いんだ。ただ……見失うべ

きではない物を見失ってはならないぞ。カラテに溺れるなかれ、だ」

「目の前にニンジャが居るぞ。さあ、殺してみせろ！」

「イヤーツ！」セイジのボン・パンチ！

「イヤーツ！」しかし私はその腕にそつと手を添えて逸らす。炎が私の手を焼いたが、特に問題は無い。

「私一人殺せないで何がニンジャを殺す者か！」

「君が何になりたいか、それは重要だが……もつと大切なのは、何を目的とするか、だ。ニンジャを殺したいだけか？」

「……俺は、あの人に……」

「過去に興味は無い。お前を助けた誰かなど知らん。何の為にニンジャを殺すのかだけを答えろ」

「……ニンジャが、邪悪な存在だからだ！」

「そうか。しかし、今君の目の前でインスタラクションを授け、カラテを鍛えてやり、話まで聞いている私もニンジャだが？ さつき一緒にスシを食べたじゃないか、私は邪悪か？」

「……ニンジャである以上、殺す」

「もつと柔軟に考えるんだ。殺すべきでないと考えたなら殺さなければ良いじゃない

か。それは誰の正義だ？ お前の正義はお前の物だろうに」

「イヤーツ！」

「反論せずに殺すのは良いが」腕を掴んで足払いをかけ、彼はその場に倒れ込む。「殺せなければ情けないだけだな」

「フウーツ」「悪かったな、随分と痛めつけてしまった。ほら、手を貸してやる」

やはり若い。頬を撫でて、笑いかけてやる。

まだまだ若い。カラテも未熟だが、向上心は有る様だ。心は脆い所も有り、その奥に暗い感情を抱えてはいるものの、鍛えれば伸びる男に見える。

「何、まだニンジャになつたばかりなんだろう？ 何をするにせよ今の君には力が足りないのだから、私から技を盗む気でいれば良いじゃないか」

「私も、さつき起きたばかりだからね。お互いに知識を交換すれば、互いの得になる」

「リアルニンジャ……カツ・ワンソー……か」

「……ニンジャソウルか、あいつの研究テーマだったな、そういえば」

「あいつとは？」

「友人だよ。胸が豊満な美人だ。あいつも死んだのかねえ」

あの死にそうもない女が居ないのは、どうにも違和感が強かった。

「今の俺に力が足りないのは、分かりました……俺を、鍛えてください」

「勿論だ」「殺す気で鍛えてやるから、期待してくれ」

「ああ、それより、身体を洗える場所は無いか。寝起きは冷水を被るのが好きなんだ」

+

「ニンジャが……ポーを振り上げ……」

「うむ。いや……なんだか、見所があるぞ、こいつは」

+

それはヤクザでもなく、天狗でもなく、またヤクザ天狗でもなかった。

「断罪の使者、ヤクザ大天狗参上！」

「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」

「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」

「ヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」「イヤーツ！」

おお！ モーターであるヤクザ大天狗が、古代リアルニンジャのイタカとカラテを交えている。そして一步も退かない。これは一体……！

そう、彼はピストルカラテとテクノカラテ、そしてリアルニンジャの記憶していた様々な戦闘手法を組み合わせた総合カラテを拾得しているのだ。

しかし、それだけでリアルニンジャと戦えるだろうか。答えは否だ。それだけではない。ヤクザ天狗が使っているサイバネ、答えはそこにある。

なんと、そのサイバネには今は無きオムラ社の紋が焼き付けられている。

ヤクザ天狗はオムラ社の残党と偶然出会う事に成功し、秘密裏で対ニンジャ・対オナタカミに使われる予定だった技術の結晶を一部提供されているのだ。

モーターツヨシに使用された技術を、モーターでも運用できるレベルまで落とし込みつつ、十分な破壊力を生む物へ仕上げている。

「某社には真似できないオムラ社だけの技術です」というアナウンスがサイバネから流れた。これも宣伝だ。

徹底的に強化され尽くしたヤクザ天狗はもはやただの天狗では収まらない。そう、ヤクザ大天狗なのだ。

「スツゾコラー！」 ヤクザ大天狗の腕から矢の嵐が吹き荒れる！

「おい、それはやめろ！」

イタカは全身からカラテを放出し、矢を全て叩き落とした。それは毒矢なのだ。

……ま、まさか！ その腕に仕込まれた矢の毒はタケウチではないだろうか!?

改善に改善を重ねられたそれに比べればニンジャを行動不能にする程度の代物ではないが、このヤクザ大天狗にはそれで十分！

「ザツケンナコラー！」

「イヤーツ！」

+

「ふむ？ ……ああ、そうか。ドーモ、ナラク・ニンジャⅡサン。イタカです。久しいね、ナラク」

「う、ごつ……オヌシ、ナラクの何を知る!？」

「ああ、昔、彼とは何度かね」

「ヌウ………黙れナ………ナラ………フジ………フジキド………黙っ………ておれフジキド！ こ

やつは儂の獲物ぞ！ 儂でしか殺せぬわ！」

「ドーモ、ナラク・ニンジャです……ニンジャ、殺すべし！」

「ははっ、変わらぬカラテだ！ それでは進化し続けた私は捉えられん」

「貴様のジツが如何に優れていようと、儂に同じ手は通じぬ！」

「ほう」

「そういう手で来る事は予想済みだな！」

「どうやら、結構に良い身体を使っていると見える。前の時は劣悪な身体のお陰で滅ぼせたが……流石にしぶとい年寄りだ」

「抜かせこわっぱ！」

「私だってこれでも君と同じくらい歳のなんだがなあ。イチロー君？ おっと」

「しかし、逆に抵抗が強い様だな。前の身体に比べて強い分、抵抗が強くて結果的には同じくらいか？」

「ンアーツ！」「これは少し……まずいか？」

「分かったよ、ナラク。その身体の持ち主に私の弟子が会いたがっているからな、何とか

会わせてやりたがったが、加減は出来そうもないぞ」

「むっ？ ……ナラクの支配から抜けたのか」

「やるな、君。名前は？」

「ニンジャスレイヤーだ」

「違う。人間としての名前を教えてください」

「……イチロー・モリタ」

「それも恐らくは違うだろう。私の第六感が言っている」

「フジキド・ケンジだ」

「フジキド〓サンか！ 良い男だ、昔の、まだ枯れる前のリアル・ニンジャ達を思い出すよ。あの頃は仙人めいて俗世と離れる者も多くてね……懐かしいな」

「覚えておくよ、フジキド〓サン。ナラク、聞いているな？ 本当に良い身体を得た物だ。力とはカラテやジツだけではない事をよく分かっている。前の使い捨てと同じにするなよ、大切にすると良い」

そして、チャドーによるナラクの抑え込み。

「……待った、チャドーだと？」

「待て、君。ニンジャスレイヤーとか言ったな。君はチャドーが使えるのか」

「誰から教わった？ いや、警戒しないでくれ。敵意は無いし、実の所私もチャドーは使える」

「スウーッ！ ハアーツ！ ……と、まあこういう感じだ」

「聞きたいのは、それを教えたのはドラゴン・ニンジャ克蘭の誰かという事だよ」

「やはりドラゴン・ニンジャⅡサンが？」

「……そうか、彼女は生きてるのだな」

「……良かった。そうか、生きてるんだな。本当に良かった」

「……ところでニンジャスレイヤーとか言ったな？」

「うむ」

「そうか。いや、お前に助けられた子供が居てな。ニンジャキラーと名乗って邪悪なニンジャを殺しているのだ。少し会ってやってくれないか」

「……いや、私にはその子供と会う理由がない」

「そして権利もない、か」

「分かった。だが一言くらい、残しておいてくれ。本当に君へのソンケイを感じている

男なんだ」

「私に輝く物を見つける事は無い」

「それが、伝言か」

「そうだ」

+

「会ったぞ、ニンジャスレイヤーIIサンに」

「何……彼が生きていてくれたのですか!？」

「何故連れてきてくれなかったのでグワーツ！」

「本人が会うべきではないと言ったのだ」

「それで、どうでしたか、本物は……」

「ああ、思わず感動したよ。あれほど凄まじい殺意と憎悪を制御して、その上で戦いを続けるとは恐れ入る。お前が言った通り、ある意味では荘厳な存在だったな」

「それは……」

「だが、本人は自分になど憧れてはならぬと言っていたよ」

「セイジ。私は君が好きだ」

「……!？」

「こう言えばオボコめいた男は一撃で落ちるとド……友人に教わったのだがな、違うか？」

「だが嘘は言っていない。私は君が好きだとも。お前が才能を持ったニンジャだからな」

「私は弟子を取った事など無い。これが初めてでな。お前は必死についてきたが、自分でも無茶をしたと思うよ」

「乗りかかった船だ。責任は取るが、セイジよ。だからこそ、ここからはお前の道なのだ」

「ニンジャスレイヤーは憎悪の殺戮者だ。その中に人間性を持ち、人としての尊さすら見えた。お前にはそれが無い。黄金の様な輝く心が無い」

「だが、だからと言ってニンジャに逃げる必要は無い。私に言わせればお前など力だけがニンジャの小僧だ」

「その上で教えてくれ。何故、ニンジャを殺すのだ？」

「……」

「俺は、ただ、ニンジャスレイヤー＝サンの様になりたかったんだ。だが、センセイのイ

ンストラクションを受けた今、俺の戦う意味は変わった」

「ニンジャが過去の亡霊だというなら、今の俺達が何故亡霊に殺されなければならない？ 俺は家族をニンジャに殺された！」

「ニンジャスレイヤー〓サンは人間性を保っていたと言ったな」

「そうだ」

「ならば、私もそうするまで！」

「勘違いするなよ、真似ではない。私はセイジだ。ニンジャキラーだ。いずれ、自分なりの理由を見つける。それまでは、家族を殺された痛みを胸に、邪悪なニンジャとのイクサを続けるまで」

「言っておくが、ニンジャスレイヤー〓サンのカラテはお前の遙か上を行くぞ。今のお前では勝てない」

「もとより勝てるとは思っていない」

「頑張れよ、セイジ」

「はいー！」

「よし、オイランドロイドでも呼ぶか」

「なに？」

「何だ。セイジは知らないのか、オイランドロイドだよ。今の世は興味深いな。女まで製造される時とは、まさに世も末だ」

「いや、女は製造されていな……いや、当たらずとも遠からずか？」

「何をしている？ 早く行ってみたいのだ。ニチヨームとやら、面白そうだな」

「……センセイはいつもこうだ」

+

「ドーマ、ネザークイーンです……そっちは」

「ドーマ、セイジです」

「ドーマ、イタカです。ここがニチヨームですか」

「見て回りましたが、人々の目の輝きはこちらの方がずっと上ですね。悪くない、悪くないですよ」

「センセイ、その言葉遣いは何ですか」

「何ですかセイジ。ひよつとして君は、私が乱暴な事しか言わない蛮族の勇者か何かと勘違いしているのではないでしょうね」

「いえ、すいません」

+

「ニチヨームが攻め込まれている様だよ。セイジ、君はどう……ああ、聞くまでも無しか」

セイジはもうそこに居なかった。自分のニンジャ装束を取り出し、既に走り去っていったからだ。

「うん？」

学生、という奴だろうか。男女混合で入ってきていた。私はとつくに気づいていたが、イクサの近くであの様なモーターが遊んでいる姿は目に付くだろう。

そこに、一人だけ、妙に気後れした風な少女が混ざっている。服装も無理をしている。雰囲気が強く、周囲から随分と浮いていた。

しかし、どこか寂しげなその目を見ていると、何故だろう、自分を見ている様な、そ

んな気がした。

+

「イヤーツ！」

彼はWassshoi!の言葉と共にボン・パンチによるアンブツシユを仕掛け、バイセクターを後退せしめた。

しかし、バイセクターの復帰が早い！ 彼は僅かな動揺の後に巨大チャブ投擲を行っていた。

「イヤーツ！」が、現れた男は即座に後方側転回避を行ってこれを紙一重で回避し、逆に片手の拳でチャブを殴りつけ、勢いを殺してチャブを奪い取った。

「貴様……その姿」

「ドーモ」

バイセクターの言葉を彼は無視した。聞く耳など持たない。

そして彼は、サツバツとした空気の中で挨拶をする。

カラテを以て、その場に堂々と立っていた……！

「ニンジャキラーです」

その目には、強い怒りが浮かんでいた。

十

彼のニンジャ第六感が告げていた。相手は凄まじいカラテの持ち主と、妙なジツを使うオバケまがいのニンジャが一匹、イタミ持ちが一人だ。

こちらは、傷ついた女ニンジャ一人に、厳しい状態のネザークイーンが一人。圧倒的不利。

以前の自分なら戦略的撤退か、全てのニンジャを殺すと息まいていただろう。彼は口元を僅かに歪ませた。

「任せよ、二人とも休んでおれ」

「でも、アータだつて」

ネザークイーンは、不利を理解しているのだろう。当然だ、彼の恋したニンジャスレイヤーならまだしも、自分はただのマニアック。勝てるとは思えぬ。

しかし、セイジは笑い飛ばした。センセイのインストラクションは実際確かだ。相手は強いが、戦わねばならない相手だ。

「ニンジャキラー!」「ニンジャキラーだど!?」「何者だ!?」「ニンジャスレイヤーではないのか!」というやりとりが有ったが、セイジは知らない。

「……何かと思えば、奴の発狂マニアックか」

「貴様、まさか彼にっ」

「その姿というだけで万死に値する!」

バイセクターの機械めいた声に、確かな怒りが乗った!

「グワーツ!」「グワーツ!」もう一撃!「グワーツ!」

「イヤーツ!」セイジのカラテが合間を縫った!「グワーツ!」

それはWasshoi!の言葉も無く飛び込み、バイセクターを蹴り飛ばしながら後方側転を決め、セイジを救った。

「ドーモツ……サツバツナイトです」

誰に分からなくとも、セイジが知らぬ筈は無い。この気高いまでの殺意、深い憎悪と漂うカラテ。間違いない、彼は……!」

「私はサツバツナイトだ」

その一言で、セイジは彼が何故変装をしているかの理由を察した。

「さ、サツバツナイトⅡサン……あなたは」

「……そこで寝ておれ。オヌシは実際限界であろう。私が後を繋げてやる」

「いいえ。まだ、やれます！」

「私はデイスエイブラーⅡサンを、サツバツナイトⅡサンはバイセクターⅡサンを！」

「分かった」

もう負ける気はしなかった。

+

トイレの扉を放り捨てたのは、ヤモトⅡサンじゃなかった。

+

「はいはい、ストップ」

「誰も見ていないなら他人を傷つけても良いと？ 見た所、どう見ても彼女は嫌がつて

いるのに」

薬物によつてとろんと溶けた瞳だ。

その少女はカワイイだったが、苦痛と、絶望に染まりかけていた。純朴そうな顔立ちで、きつと騙されて此処へ連れ込まれたのだろう。

会話も幾らか聞いていたので、恐らく間違っていない。ただ遊んでいるだけなら無関係だが、目の前で馬鹿をやっている連中を懲らしめるくらいなら、私の領分だ。

「はいはい、イヤーツ！」

とりあえず、男の方には気を失って貰った。殺しておくべきかと考えたが、後で少女が殺人を疑われるのはいかにもまずい。

「怖かったね、もう大丈夫だよ。薬が辛いなら、吐いてもいい。背中を撫でてあげる」
極力優しい言葉遣いをしたつもりだ。

かなり薬の影響が残っている様で、目に焦点が合っていない。このままでは会話も出来ないだろう。

なぜか失望した様に私を見ている。

「ごめん、ヤモトⅡサンがどこにいるか分かる？ 私じゃちよつと、年齢差がね」

「……ヤモトⅡサン？」

「い、いま、ヤモトⅡサンって、う……っ」

吐き出された物を手で受け止めた。流石に床へ垂れ流す訳にはいくまい。

「ああ、まだ静かにしていないと。さあ、私が押さえておいてあげるから。トイレで、ね？」

この子は私へどこか申し訳なきような視線を送ってくる。構わないのだ。

それに、彼女の寂しげな目はどうしても放っておけない。嘔吐くらい気にするものか。

手に付着した物をカラテで弾き飛ばし、薬で綺麗にしておく。水で洗い流せば後は残らない。

「言つてごらん。こんな目に遭つたんだ。誰かに悩みを全部話せば、きっと楽になるよ」

+

その時、デイスエイブラーがバイセクターを突き飛ばした。

「アバーツ！」

ゴウランガ！ サツバツナイトの一撃がデイスエイブラーの心臓を貫いた。致命傷だ。だが、構わずデイスエイブラーは振り返り、バイセクターに何かを言おうとした。

「イヤーツー！」

カイシヤク！ デイスエイブラーの胴体が二つに裂けた。「サヨナラ！」

バイセクターは、いやヒュージシユリケンは、デイスエイブラーの言葉を聞き取る事は出来なかつた。だが、何を言わんとしたかは、完全に理解できた。

かつてのソウカイヤの生き残りがまた一人死んだ。だが、悲しむ事は無い。その思いもまた、シックスゲイツだった彼の血となり、力となる。

ここで全てを解決させる。

「バイセクター＝サン」

「ハイ、ラオモト＝サン」

「プランBを発動した」

小気味良い程の一言だ。

「お前は最早負け犬だ、負け犬は切り捨てる。お前の最後の任務は、そこにいるニンジャスレイヤー共を足止めし、ミサイルでニチョームもろとも消し去る事だ」

その言葉と裏腹に、チバの声は決して冷酷ではない。暴君ではなく、賢君がそこにいる。ラオモト・カンの息子がそこにいる。

「僕を裏切つてまで仇を討ちたいか。お前の手で？ お前がかつてシックスゲイツだったからか？ ソウカイヤで生きた者達の無念を背負うか？ それともアースクエイク

の敵討ちか？　だが、駄目だな。それは僕がやる事だ……僕だけが！　やるべき事だ！！」

ヒュージシユリケンは、無くなった筈の身体が震えた様に感じた。チバの身から溢れる強固な意志が、IRC越しですら響き渡った。

もしも、ニンジャスレイヤーの前でなければ、ヒュージシユリケンはその場でドゲザし、チバの言葉を受け止めていただろう。

「僕は、ラオモト・カンではない。だが、僕は父から受け継いだ全てを守らねばならない。だから、あれは決して許してはいけない」

「だから、ヒュージシユリケンⅡサン。お前の全てを僕に預ける。僕の手になれ。僕がニンジャスレイヤーを討つ。だが僕はニンジャではないからな、その為の腕になれ」

「足止めせよ。倒そうとは思わない……僕に討たせる。これは、僕の戦いだ」

「ヨ」ヒュージシユリケンは幾つもの言葉でチバを称えようとした。だが、頭に浮かんだのは、一言だけだった。「ヨロコンデー！」

ラオモト・チバはラオモト・カンとは違う。だが、それでも彼は帝王なのだ。父の全てを受け継ぐ資格を持ち、受け継いだ全てを懐に入れられる、それだけの器を持っているのだ。

自分は何を考えていたのだろうか。栄光あるシックスゲイツの最後の一人として全て

を背負った気になっていたが、そんな自分すらもラオモトⅡサンは背負おうとしているのだ。

涙は流れなかった。だが、心が叫んだ。

バイセクターの、ヒュージシユリケンのカラテが速度と威力を増した。それまで乗っていた魔物の如き憎悪のカラテは、清廉さすら纏う忠義のカラテに変わっている。

だがサツバツナイトも負けてはいない。憎悪のカラテは忠義の意志を踏み潰す様に精度を上げていく。

「イヤーツー！」

+

モーターであるラオモト・チバは、その戦いの詳細を目撃出来なかった。だが、画面越しにでも伝わるバイセクターの意志は、そのカラテは、理解出来た。

「……」

デイスエイブラーが破れ、バイセクターが一人で戦う事になった瞬間、チバは即座にプランBの発動を命令した。アガメムノンが言葉を挟む暇すら与えず、部下に疑問を与える時間すら作らなかった。

チバは座り込み、グンバイを握った。その手は僅かに震えていた。恐怖だろうか、い

や、違う。

「アガメムノン。お前から見て僕は弱いか。そうだろうな」

「だが、僕はそれでもこの組織の頂点だ。お前はただの補佐で、僕の言葉を止める事は出来るが、僕の決定をお前が決める事は許さん」

そこには、わがままで傲慢な子供ではなく、怒り狂う帝王の姿が有った。

アガメムノンは自分が飲まれている事を感じて、その笑顔を強めた。

「ご英断を指示します」

「そうやって駒が予想より使える物だったとほくそ笑んでいるが良い。お前にはそれが限界だろうさ」

アガメムノンはまるで動じなかった。

だが、動じない事こそ彼の弱点だ。チバは内面の激流を押さえつけた。

「ネヴァーモア」

「はいっ」

「目に焼き付けておけ。あれがお前の目指したシックスゲイツだ。ソウカイヤの、ヒュージシュリケンだ」

「そう、例え失敗したとしてもだ」

ヒュージシュリケンを信じていた。

だが、シックスゲイツ、ゲイトキーパー、そしてラオモト・カンを無惨に殺戮した存在に、まだ父に及ばぬ自分の手が届くかは、チバの中の冷静な部分が疑問を投げかけていた。

+

「セイジめ、立派になった事だ。これはもうそろそろ本格的にインストラクションを授けるべきか」

「え？」

「いや、何でもないよ。アサリⅡサン」

アサリⅡサンは思ったよりも軽かった。そしてとても良い子だった。

「ほら、それより見えてきた」

風のお陰か、それとも……のお陰か。アサリⅡサンはかなり調子を取り戻していた。頭痛は残っているのか、頭は押さえていたが。

それも、ヤモトⅡサンが見えるまでの事だ。

今までの苦痛の全てが報われた、そんな笑顔をしていた。

「ヤモトⅡサン！ ユウジヨウ！」

「えっ……ユウジヨウ！」

「うわっ……」

「あ、アサリⅡサン!?!」

「ご、ごめんなさい。さつき、変な薬を飲まされちゃって……頭が痛くて……」

「おい、私じゃないぞ。飲ませた馬鹿共には気を失って貰った」

「でも、会えて嬉しい」

「アタイもだよ。ずっと会いたかった……」

お互いの存在を確認するかの様に、二人は深く深く抱き合った。

「アサリⅡサン、ちよつと背が伸びた？」

「うん、ヤモトⅡサンは変わらないね……」

「そうだね、もう人間じゃないから、かな……」

「ヤモトⅡサンは、ヤモトⅡサンだよ」

「良かったな。二人とも」

「ヤモトⅡサン。君ならあのミサイルを弾き返す事が出来る。まるでホームランの様にね、ふふ、私もテレビを見て学習したんだ」

「でも、アタイにはそんな」

「シ・ニンジャなら出来た。彼女のサクラエンハンスはまさに圧倒的だった」

「君はシ・ニンジャじゃない。だが、シの力を持っている。私を信じられないのならシ・ニンジャを。彼女すら信じられぬなら君自身のカラテを、それすら無理なら……君の親友を信じるんだ。彼女を死なせて良いのか？」

「……イヤだ!」

「ならば君は出来るさ、やってみせろ! 私も手を貸す!」

+

その場の全てがブツダに祈った。

桜吹雪が舞い踊る。桜の塊の中には、三人の女が立っていた。ヤモト・コキだった。

アサリがヤモトを抱き支え、そして、イタカが二人を守っていた。

ニチョームの全てがサクラに包まれた。それは、尊いまでの美しい光を放っていた。

ミサイルは光に弾かれ、遙か空中の更に先、ミサイルを搭載した戦闘機に衝突し、爆発した。タケウチは効果を発揮する事もなく、消えていった。

己の全てのカラテを使いきり、ヤモトがふらりと倒れた。

即座に古のニンジャピルを飲ませようとしたが、口を開ける気力すら無い様だ。

「アサリさん、これをヤモトさんに飲ませてくれ。方法は問わない、口をこじ開けるなり、口移しをするなり、何でも良いから飲ませるんだ」

タケウチが落ちる中で、ブツダに祈る感情すらカラテに注いでいたニンジャが二人、まだ戦いは続いている。

「イヤーツー！」

ヒュージシユリケン作戦が失敗した事など考えていなかった。ただ、目の前のニンジャスレイヤーを足止めする事だけを考えていた。

成る程、確かにミサイルは落ちなかつた。だが、チバならばニンジャスレイヤーの疲弊を見逃さない。必ずやアマクダリの精鋭を呼び出すだろう。自分が時間を稼げば稼ぐ程、ニンジャスレイヤーを追い詰めるのだ。

ヒュージシユリケンのカラテは、彼が生きてきた中で最高峰の物へ到達していた。

何故限界を超えて戦い続ける事が出来るのか。

今の彼は一人ではないからだ。

カラテは弱くとも堅実に働いたバンデイツトが、

脚を失って尚力強かったビホルダーが、

妙な性格だがワザマエは確かだったダイダロスが、

少し気弱な所も有ったが自分を歓迎してくれたガーゴイルが、

いけ好かなかったが最後まで忠義を尽くしたヘルカイトが、

自分にシックスゲイツとしての生を授けたゲイトキーパーが、

唯一無二の相棒であるアースクエイクが。

そして、崇拜すべきラオモト・カンが。

ソウカイヤを信じ、ソウカイヤという一つの家族として過ごした全ての者達が抱いた
想いと願いが、今のヒュージシユリケンの両肩に乗っている。

しかも、ラオモト・チバは更に重い物を、ソウカイヤの全てを背負っている。自分は
その腕となつているのだ。サイバネが崩れたくらいで何だというのだろう。ニンジャ
ソウルが焼け付く程度の苦痛など、最早軽い物だ。

誰かが思わず口笛を吹いた。

だが、サイバネの肉体は彼のカラテとセイシンテキについていけなかった。サツバツナイトの一撃を避ける度に、受け流す度に、ニンジャの戦いにも耐えうる頑強なサイバネが軋み、悲鳴をあげる。

ついに彼の肉体が砕けた。それでも残骸は動き続ける。

「アース……アー……俺は、まだ……」

ゆっくりと伸ばされた手が、サツバツナイトに近づいた。疲弊した彼は動けなかった。

だが、今の彼は一人ではない。

「イヤーツー！」

炎がサツバツナイトの前に壁を生み出した。

気絶から立ち上がったセイジの炎がヒュージシユリケンを包み込み、消し去らんとする。

仇敵を前にしたヒュージシユリケンは、自らの身が焼かれる事などまるで気にせず手を伸ばし続けた。

「イヤーツー！」

だが、サツバツナイト、いやニンジャスレイヤーが炎を越えて一撃を加えた。

だが！

「イ……ッ！」

ヒュージシユリケン是最期の力を振り絞り、自分を貫く腕を掴まえた。爆発四散しない！ 意志で押さえつけている！

このままでは危険だ。サツバツナイトは腕を振り、ニンジャキラーはカトンで焼き滅ぼそうとした。だが抜けない！ ヒュージシユリケンは力を緩めない！

そう、炎もカラテも意味を持たない。彼は既に死んでいるのだ！ ソウカイヤの総意が、彼の物だった肉体を動かしている！

「ラ……オモト……サン……バン……ッザイ！」

自爆だ！

ソウルの全てを潰され、サイバネはすり潰されている。だが、残った全てを爆発させた衝撃は、小さい物ではない。

「グワーツ！」

如何にカラテが有ったとしても、掴まえられてしまえば避けられない。サツバツナイトは正面から爆発を受け、吹き飛んだ。

このままでは叩きつけられ、致命傷となるだろう。

「イヤーツ！」

しかし、寸前で間に合ったニンジャキラーが受け止めた。

彼とて無事ではない。初めての強敵との戦いで疲弊した身に、爆風と衝撃は厳しい物となる。

だが、喜びが勝っていた。セイジは、守ったのだ。

メンポに刻まれた「殺」「伐」の文字が、「忍」「殺」に見えた。

自分のメンポにも刻まれた文字だ。だが、格が違う。そこにある感情の深さが違う。重みが違う。全てが違う。

ここに至って、セイジは自分の意志の軽さを思い知らされた。しかし、悔しくはなかった。

「サツバツナイトⅡサン……」

「……あの時、あなたが助けてくれなかったら、俺はとっくに死んでいた……今回は、あなたの助けになれたかな……」

まるで父親か何かだ。セイジは、そんな感想を抱きながら意識を失った。

十

「……すまないが」

「彼らは今、感動を味わっている所なんだ。用事があるのはわかっているが、ここで止まっていて貰おうか」

スパルタカスとイタカは向かい合った。

誰も二人の一撃を見る事は出来なかった。ただ、結果として二人が腕から血を流している事だけが認識された。

「……素でこの速度を出せるニンジャに会うのは久しぶりだよ。いや、流石に古代ローマカラテだ。侮れない」

「こっちこそ、お前みてえなニンジャに会うのは初めてだ。何だあ？ その早さとカラテは、化け物か」

「古代ローマカラテの化け物には言われたくないね」

「お互い、ここは痛み分けでどうだい？」

「……そうさな。これ以上は完全にイクサだ。今のアマクダリにお前みたいなのは化け物を相手にする余裕は無いな。個人的に続けたいのは有るが」

「やり合うか？」

「……いや、お前のフリーリンクザンだ。ここじゃ分が悪いなあ」

「では退け、私も弟子を連れてさっさと帰りたんだ」

「ああ、だがまあ、とりあえず上の奴に話を通してやらないとな」

「構わん、僕が話す」

「……ふん、良いだろう」

「ほう、それは何故？」

「お前がどの様なニンジャかは見れば分かる。お前が僕の札を潰している間に、どうせニンジャスレイヤーは逃げ切ってしまうからな。無駄に消費する事も無い」

それに、ヒュージシユリケンも望まない。口の中で、彼はそんな風に言った。

あの小さな身に、どれほどの重さを背負っているのだろう。悪党ではあるが、重圧に耐えて戦う姿は本物だ。

「成る程、見た目以上に王様だ。いや、感心したよモーター。名前を聞いておこう」

「シツレイだ。貴様から名乗れ」

「失礼、イタカだ。この通り、ニンジャだよ」

「……僕はラオモト・チバだ」

「チバ君か。カワイイなモーターながら天晴れだね。頭撫でてあげようか。いや、昔は

モータールの村で優しいお姉さんをやっていた時期も……」

「テメツコラー……」

地鳴りの様な声だ。

「若にナメた口ききやがってコラー……スツゾコラー！」

「ネヴァーモア。どうせこいつは聞く耳を持たん」

愚直な強さに溢れていた。あの様な狂犬が忠犬に早変わりするのだから、不思議にすら思う。

「よくお分かりで」

「分からなければこの立場には居ないさ、僕は」

「貴様はアマクダリ・セクトの。僕の敵だ。覚悟しておけ」

「そちらこそ、背負った物に潰されない様に成長する事だね」

「……ふん」

+

「それで？ アサリⅡサン、もういいの？」

「はい。ヤモトⅡサンにだって自分の生活がありますから」

「また会いたいと思ったら、いつでも私へ連絡を寄越してね。手を貸すから」

「ハイっ！」

「ん、良い返事だ」

「あ、あの」

「ん？」

「確か、イタカⅡサンも、友達と離れたままなんですよね？」

「そうだね。うん、そう」

「だったら、あの、きつと、会えます！ 私だってヤモトⅡサンと会えたんだから！」

「それで、その。お守りになれば良いと思って……ヤモトⅡサンと一緒に作ったオリガ

ミを……」

「くれるの？」

「ありがとう、アサリⅡサンに会えて良かった」

「ね、私もアサリⅡサンと友達になっていい？」

「私もなりたいですっ」

「それは良かった。嬉しいよ、ユウジヨウ！」

「ユウジヨウ！ えへへ……」

「それじゃあ、私はここなので」

「ああ、またね」

「会えるか。ふふ、アサリⅡサンは本当に良い子だ」

「……センセイ」

「おう、セイジ。どうした」

「俺はまだ未熟ですね」

「今更か？」

+

「ドーモ、ドラゴン・ニンジャⅡサン。イタカです」

「……ドーモ、イタカⅡサン。私は……」

「ユウジヨウ！」

思い切って抱きついた。昔は出来なかった事だ。

背中に手を回すと、ドラゴンは諦めた様に私の背中を叩いた。昔はこれでチャドローの一撃を受けたのだが、昔より温厚になったらしい。

「会いたかった。私以外はみんな死んだのかと思ったから」

「……すみません。私は」

「しかし、随分と変わったな。顔立ちが幼くなったし、雰囲気もかなり丸くなった様に思うのだが……その胸は変わらないか。ああ、君は間違いなくドラゴンだな」

「すみません、私は、ドラゴン・ニンジャではありません」

「記憶を、失ってしまったのです。今の私はドラゴンではなく、ユカノです」

「……何？」

「嘘ではなく？」

「は、」

「本当に？」

「……すみません。確かに、あなたはドラゴン・ニンジャにとつての友人でした。確かなユウジヨウが有った事、覚えていますよ」

「気遣わしげだ。ドラゴン・ニンジャはそういう事を滅多に言わなかった。少なくとも私に対してそんな気遣いなどする女ではない。」

も似たコトダマ空間の動きに目を見開いた。

アルゴスが激しく行動を乱されていた。その放送は、その放送を届けたノイズは月を遙かに越えた先まで突き破っていた。磁気嵐すら撃ち抜くノイズは、やがて地球圏の全てに放送を響かせた。

既に廃棄された攻撃衛星がレディオを流した。

大量の血で前が見えないが、それはどうでも良かった。ただ、一人の青年が放った魂の叫びが、この世界全てに行き渡った。その事実が最高の満足だった。

鼻血を拭った。